第四章　徐州作戦

北支那方面軍の徐州作戦要望

大本営の認可を得て、三月中旬から第二軍が大運河以北の撃滅戦を実施したことは既述のとおりである。一方、中国軍が徐州、台児庄方面に優勢な兵力を集中し、攻勢を企図しつつある情報（主として通信諜報）が得られた。

北支那方面軍第一課長下山大佐は三月二十四日、参謀本部作戦課長稲田中佐に対し、徐州作戦の必要について次の電報を発した。

第二軍ノ作戦ハ累次報告ノ方針ニ基キ指導セラレツツアルモ今ヤ優勢ナル敵ニ近ク接触シ敵ノ所謂決戦的攻勢ヲ邀撃セサルヘカラサル態勢ニアリ　此ノ戦闘ハ固ヨリ我ニ十分成算アリト雖モ蚌埠方面友軍ノ積極的行動ニ依リ之ニ策応セシメラルルニ於テ其成果ノ更ニ偉大ナルハ明カナリ

其ノ結果カ或ハ敵ノ徐州放棄トナルヤモ知ルヘカラサルモ兎ニ角現時ニ於ケルカ如ク敵ニ自由ナル兵力ノ転用ヲ許シ我ハ逐次劣勢ヲ以テ優勢ヲ撃チ避クヘカラサル損傷ノ大ヲ来スハ全局上其不利極メテ大ナル亦言ヲ俟タサル所ニシテ徐州ノ得失ハ先ツ第二トシ我全般的戦略態勢ノ有利ヲ発揮シ今ヤ徐州ヲ中心トシテ蝟集シツツアル敵ノ集団ニ対シ成ルヘク可及的小ナル犠牲ヲ以テ可及的大ナル打撃ヲ与フル如ク処置セ

ラルルヲ焦眉ノ急ナリト確信ス

万一敵カ恣ニ自由ナル兵力ノ転用ヲ断行シ寧ロ我ニ対シ各個撃破ニ似タルノ機動ヲ敢テシツツアルモノハ蓋シ傍受電ニ表ハレ居ル如ク偏ニ我兵力使用ニ関スル拘束ノ気配ヲ窺知シツツアルニ依ルニ非スヤ敢テ明断ヲ垂レラレンコト切望ノ至ニ堪ヘス

大本営の徐州作戦下令

大本営は戦面不拡大方針で、第二軍の作戦も敵の反攻撃破という限定作戦として認可したものであった。大本営は台児庄方面に多大の中国軍、特に湯恩伯軍が出現したのを見て、蔣介石軍主力に二大打撃を与え、敵の抗戦意志を挫折させる好機なりと考え、徐州作戦を実施することを決した。

大本営は徐州作戦において、大きな戦果を収めることを考え、また、会戦後の態勢を予想し、将来実施を予期する武漢作戦を考慮に入れて作戦計画を策定した。大本営は当年初頭においては武漢作戦を翌年実施と予期していたが、その実施を徐州作戦後、新設師団の編成が終わり、準備でき次第繰り上げて実施しようとした。戦面不拡大方針の大転換である。

大本営陸軍部は四月三日、徐州作戦実施を内定し、この旨を同日現地軍に伝え、現地軍参謀を東京に招致して四月七日に徐州作戦を下令した。

当時の大本営作戦課長稲田中佐（のち中将）は戦後、次のように回想している。

瀬谷、坂本両支隊の台児庄からの後退は戦況から見て当然である。当時、方面軍や第二軍がなぜもっと早く後退させぬかと、じれったい感じでいた。台児庄からの後退は敗退ではなく、いずれ下がること

は大本営と初めからの約束であるから問題にしていない。

台児庄方面に「湯恩伯軍出現」の情報を得たとき、これはえらいことになった、前に出過ぎている第二軍の一部を早くまとめないと危ないと心配した。湯恩伯軍の出現は蔣介石主力が決戦を求めてきたことを意味するからである。瀬谷、坂本両支隊が危機を脱して後退したので、安心するとともに、敵の主力を寄せつけた結果となったので、それでは徐州作戦をやろうということになり、急いで準備に取り掛かった。

徐州作戦の命令、指示は次のとおりである。

大陸命第八十四号（昭和十三年四月七日）

一　大本営ハ徐州付近ノ敵ノ撃破ヲ企図ス

二　北支那方面軍司令官ハ有力ナル一部ヲ以テ徐州付近ノ敵ヲ撃破シ蘭封以東ノ隴海線以北ノ地域ヲ占拠スヘシ

三　中支那派遣軍司令官ハ一部ヲ以テ北支那方面軍司令官ノ前項徐州付近ノ敵撃破ニ協力シ且徐州（含マス）以南津浦線竝廬州〔南京西方百三十キロ〕付近ヲ占拠スヘシ

四　細項ニ関シテハ参謀総長ヲシテ指示セシム

大陸指第百六号（昭和十四年四月七日）

大陸命第八十四号ニ基キ左ノ如ク指示ス

一　北支那方面軍司令官、中支那派遣軍司令官ハ徐州付近ノ作戦ニ関シ緊密ニ連絡スヘシ

二　右作戦ノ参考為別冊「徐州付近作戦指導要領案」ヲ交付ス

三　大陸指第五十八号ニヨル北支那方面軍司令官ニ対スル第百十四師団ノ運用ニ関スル制限〔平津地方に控置〕ヲ解ク

大陸指第百六号別冊

徐州付近作戦指導要領案

昭和十三年四月七日　大本営陸軍部

第一　方針

北支那方面軍ノ有力ナル一部及之ニ策応スル中支那派遣軍ノ一部ヲ以テ徐州付近ノ敵ヲ撃破シ且津浦線竝廬州付近ヲ占領ス

作戦開始ヲ四月下旬ト予定ス

第二　要領

一　北支那方面軍ハ約四師団ヲ以テ隴海沿線ニ向ヒ攻撃ヲトリ敵ヲ撃破ス　之カ為主力ヲ以テ北方ヨリ徐州付近ノ敵ヲ撃破シ約一師団ヲ蘭封東北方付近ヨリ帰徳方向敵退路ニ向ヒ進攻セシム

二　中支那派遣軍ハ約二師団（其一部ヲ後方警備ニ充当ス）ヲ以テ南方ヨリ北支那方面軍ノ作戦ニ策応ス　之カ為津浦線ニ沿フ地区ヨリ進撃シ特ニ敵ノ退路遮断ニ努ム

三　北支那方面軍ハ徐州以北津浦線ヲ占領シ又敵撃破後ハ蘭封以東ノ隴海線以北ノ地区ヲ占拠ス

四　中支那派遣軍ハ敵撃破後ハ徐州（含マス）以南津浦線竝廬州付近ヲ占拠ス

五　両軍ハ作戦ニ関シ緊密ニ連絡ス

六　本作戦終了後北支那方面軍ハ約三師団ヲ黄河以南ニ配置シ中支那派遣軍ハ約二師団ヲ徐州（含マス）以南津浦線竝ニ廬州付近ニ配置ス

大本営派遣班

徐州作戦は、北支那方面軍が主となり、中支那派遣軍がこれに協同する形である。大本営は、両兵団の徐州方面作戦部隊を北支那方面軍に統一指揮させる案も研究したが、これは不都合なりと考え、大本営が直接両兵団の作戦を指導する方針を採った。

このため、作戦部長橋本少将以下の幕僚を「大本営派遣班」として、四月中旬から六月末にわたり現地に派遣した。派遣班には、参謀総長の細部指示を出す権限が与えられたが、実際には行使されなかった。大本営は、徐州を中心とする作戦において、南北両兵団間の作戦地境をいかにすべきかに苦心したが、五月十五日に至り、隴海線及び奎河（徐州東方を北流する河）の線と定めた。

北支那方面軍の会戦指導方策

北支那方面軍は四月十日、左記の作戦指導方策を策定した。

徐州付近会戦指導ノ方策　昭和十三年四月十日北支那方面軍参謀部第一課

第一　方　針

一　徐州付近及津浦線以東ニ敵ノ大兵力ヲ吸引シ主トシテ徐州西方及西南方ヨリスル包囲ニ依リ退路ヲ遮断シ次テ徐州ヲ攻略シ敵ヲ殲滅ス

第二　指導要領

二　第一期

1　第二軍ニ速ヤカニ所要ノ兵力ヲ増加シ同軍ハ概ネ韓荘、嶧県、沂州ノ線付近ニ於テ敵ヲ抑留スルト共ニ爾後ノ攻撃ヲ準備ス　之カ為、第百十四師団（一大隊欠）、第十六師団、戦車第二大隊、野戦重砲兵第三、第六連隊、後備歩兵一大隊、碇泊場司令部一、独立工兵連隊（丁）一、其他（舟艇、材料等）ヲ第二軍ニ配属ス

2　中支派遣軍ニ対シ一部ヲ以テ速ヤカニ淮陰方面ヨリ西北方ニ地歩ヲ進メ徐州東南地区ニ敵ヲ牽制スル如ク協定ス

三　第二期

1　第二軍ハ準備完了ニ伴ヒ四月下旬急襲的ニ攻勢運動ヲ開始シ特ニ微山湖西側ヨリ有力ナル兵団ヲ南下セシメ徐州ノ西及西南方地区ニ於テ敵ノ退路ヲ遮断シ次テ中支派遣軍ノ一部ト協力シ徐州ヲ完全ニ包囲シテ之ヲ攻略シ敵ヲ殲滅ス

2　中支派遣軍ノ一部ハ右ニ協力シ徐州ノ南東、南及西南方地区ニ於テ敵ノ退路ヲ遮断シ次テ徐州ヲ攻略ス

3　第一軍ハ一部（約一師団）ヲ以テ蘭封付近ヨリ范県付近ニ亙ル間ニ於テ黄河ヲ渡河シ（概ネ第二軍主力ノ攻撃開始ト同時頃トス）速ヤカニ蘭封東方付近ニ於テ隴海線ヲ、又鄭州以南京漢線方面ヨリ帰徳方面ニ対スル交通ヲ遮断ス　渡河ノ為第一軍ニ独立工兵（戊）中隊三、所要ノ折畳舟ヲ増加配

属ス

右ノ外蘭封以西ニ於テ黄河沿岸ニ為シ得ル限リ積極的ニ陽動ヲ行ヒ敵ヲ牽制ス　但シ黄河前岸ニ地歩獲得ハ之ヲ避クルモノトス

4　第一、第二軍間作戦地境ヲ概ネ寿張―鄆城―帰徳ノ線ニ延伸シ線上ハ第一軍ニ属セシム

5　状況ニ依リ第二軍ヲシテ微山湖西側ヨリスル機動ヲ止メ直路徐州既設陣地以北ニ於テ敵ヲ撃滅セシムルコトアリ

四　第三期

1　徐州ノ攻略ニ伴ヒ第二軍ハ蘭封付近以東概ネ隴海線ノ線ヲ占メ後方地域ノ安定ヲ図ル

2　中支那派遣軍ハ徐州（含マス）以南津浦沿線ヲ確保ス

3　第一軍ハ状況ニ応シ渡河セル一部ヲ以テ開封及鄭州ヲ攻略ス　其ノ実施ハ別命ニ依ル

五　航空兵団ハ第一、第二期ニ在リテハ主力ヲ以テ第二軍ノ作戦ニ協力、第三期ニ在リテハ主トシテ敵後方要地ノ攻撃及航空兵力ノ撃滅ニ任シ一部ヲ以テ直接各兵団ニ協力ス

方面軍の準備命令

北支那方面軍は四月十二日、徐州作戦に関する次の準備命令を下達した。

方面軍作命甲第二八六号要旨〔抜粋〕

一　方面軍ハ近ク中支那派遣軍ノ一部ト協力徐州付近ノ敵ヲ撃滅スル企図ヲ有ス　準備完整ノ時機ハX日ト予定ス

二　左記部隊ヲ付記スル如ク転属又ハ本属ニ復帰セシム

1　第一軍ヨリ第二軍へ

第十六師団、戦車第二大隊、第三師団第三野戦高射砲隊甲（以上転属）

野戦重砲兵第三連隊、野戦重砲兵第一旅団輜重隊半部（以上復帰）

2　第二軍ヨリ第一軍へ

独立工兵第一連隊第一中隊、第十六師団第二渡河材料中隊（以上転属）

3　方面軍通信隊ヨリ第二軍へ

野戦電信第二十九中隊、無線電信第六十四小隊（以上転属）

三　第二軍ハ概ネ韓荘、鄆県、隴州ノ線付近ニ於テ敵ヲ抑留スルト共ニ爾後徐州付近ノ敵ヲ攻撃、特ニ微山湖西方ヨリ有力ナル兵団ヲ以テ徐州西方ニ於テ敵ノ退路ヲ遮断スルノ準備ヲナスヘシ

四　第一軍司令官ハ一部ヲ以テ蘭封付近ヨリ范県ニ亙ル間ニ於テ黄河ヲ渡河セシメ蘭封付近ニ於テ隴海線ヲ遮断シ第二軍司令官ノ作戦ヲ容易ナラシムルノ準備ヲ為スヘシ

六　臨時航空兵団ハ現任務ヲ続行スルト共ニ次期作戦ニ協力ノ準備ヲ完成スヘシ

作戦打ち合わせ会議

四月十七日、十八日の両日、済南で徐州作戦に関する打ち合わせが実施された。主要出席者は次のとおりで、会議は北支那方面軍第一課長（作戦）下山大佐が司会した。

・大本営派遣班　橋本群少将、西村敏雄中佐、その他

北支那方面軍　下山琢磨大佐、その他

第一軍　参謀　友近美晴中佐

第二軍　参謀　長鈴本率道少将、参謀　岡本清福大佐

中支那派遣軍　参謀副長　武藤章大佐、その他

臨時航空兵団　参謀　田中友道大佐

会議の主要問題点は作戦目的（敵撃滅か、要地占領か）と作戦発起時期であった。「第一軍機密作戦日誌」は会議内容を次のように記述（要約）している。

一　作戦終局の目的は徐州攻略にして敵の撃滅はこのための手段である。

右は方面軍及び第二軍の主唱するところで、派遣軍は敵撃滅を主とする考えで対立した。大本営派遣班は方面軍の考えのごとくなるのはやむ得ないだろうとの意見であり、第一軍は派遣軍に同意であった。

方面軍は「当面の敵は世界及び国民に対する面子上退却しないであろう。そのため、徐州攻略を目標とする小規模の包囲であっても、成果は必ずしも少なくない」という意見である。

派遣軍は「第二軍が直ちに攻勢をとり、派遣軍が行動を開始すれば敵は退却するであろう。そのため、効果的方法として、第二軍の攻撃を中止して敵を抑留し、第一軍及び派遣軍をもって帰徳方面で大々的に包囲を完成し、敵撃滅を企図するを可とす」の意見である。

二　作戦発起時期の意見

第二軍は「第五師団は四月十六日から沂州攻撃を開始し、第十師団は十八日から攻撃を開始す。台児庄南方地区に進出する作戦は四月末まで続くであろう。この進出線で爾後の攻撃を準備し、第十六師団を済寧付近に集結し、六月十日ころから徐州作戦を開始する」意見である。第一軍は「攻撃開始は五月十五日ころ、これは迂回部隊が五月十日ころまでに済寧付近に集結を終わり、同地から行動を開始し、主力の渡河点〔嶧県地区〕付近に到着して渡河援護に任じた時である。従って多少は前後する」意見である。

派遣軍は「北支軍の作戦に策応するごとく作戦を開始する。東臺、高郵付近の部隊はこれに先だち成るべく早く行動を開始する。派遣軍の最初の計画は四月二十九日行動を開始し、五月四日ころ宿県、蒙城の線に進出（重点蒙城方面）する計画であったが、北支軍の攻勢が遅れるならば、第二軍の攻勢開始と同時ころにしたい。徐州までの距離が第二軍より遠いため、多少早目に行動を開始する」という意見である。

結局、作戦目的も攻勢時期もあいまいな点があった。

第一軍の開封占領要望

第一軍は作戦打ち合わせ会議において、機を見て開封を占領するを可とする意見を具申した。その理由は、㈠将来、開封は敵戦線の左翼拠点となる　㈡黄河渡河作戦部隊の補給容易　㈢第一軍の守備区域の守備が容易となる　㈣将来の戦機は京漢線方面に動くと判断されるため、黄河以南に進出して作戦の万全を期する、というものであった。

会議において、方面軍の下山大佐は、開封占領問題は徐州作戦終了後に研究する。また、第一軍の黄河以南進出部隊は将来これを引き揚げ、蘭封以東は第二軍に担任させると言明した。

第一軍は、徐州作戦終了後に開封、鄭州方面の作戦が生起することを予期していた。

方面軍命令下達

北支那方面軍は四月二十三日、徐州作戦に関する左記の命令を下達した。

方面軍作命甲第二九四号要旨（昭和十四年四月二十三日）

一　徐州北方ニ於ケル敵ノ攻勢ハ挫折セリ　然レトモ敵ハ蘭封以東隴海線及其以北ニ更ニ兵力ヲ増加シ我進出ヲ阻止スルノ企図ヲ有ス

二　方面軍ハ敵ノ態勢完キニ先タチ速ヤカニ徐州方面ノ敵ヲ撃破シテ概ネ蘭封以東隴海線以北ヲ占拠セントス　中支那派遣軍ハ方面軍ト相呼応シ約二師団ヲ以テ蚌埠、懐遠付近ヨリ行動ヲ起シ概ネ津浦線西方地区ヲ北上シ帰徳以東隴海線南方地区ニ於テ徐州付近敵主力ノ退路ヲ遮断シ一部兵力ヲ四月二十四日東臺（江蘇省）ヨリ北上セシメ方面軍ノ作戦ニ協力ス

三　第二軍ハ其兵力ノ集結ニ伴ヒ成可ク速ヤカニ攻勢行動ヲ開始シ当面ノ敵ニ対シ徐州西方地区ニ主決戦ヲ求ムル如ク攻撃シ且徐州ヲ占領スヘシ

四　第一軍ハ有力ナル一部ヲ以テ黄河ヲ渡河シ先ツ速ヤカニ蘭封、帰徳間ニ於テ隴海線ヲ遮断シ且帰徳方面ニ進出スヘキ中支那派遣軍ノ一部ト密ニ協力シ第二軍ノ作戦ヲ容易ナラシムヘシ　右渡河ノ為其ノ掩護部隊ヲ鉄道ニ依リ済寧付近ニ派遣シ該方面ヨリ行動セシムルヲ要ス　又蘭封以西黄河沿岸ニ於

テ陽動ニ依リ敵ヲ索制スルニ努ムヘシ

五　臨時航空兵団ハ其ノ主力ヲ以テ隴海線ニ向フ地域作戦ニ協力シ特ニ其重点ヲ第二軍正面ニ指向スヘシ　又中支那派遣軍第三飛行団及海軍航空隊ト密ニ協力スヘシ

中支那派遣軍の徐州会戦計画

派遣軍は徐州作戦の諸準備を進め、四月二十四日次の計画を策定した。

中支那派遣軍徐州会戦計画

一　方　針

軍ハ北支那方面軍ト策応シ徐州付近ノ敵ヲ徐州西方地区ニ於テ捕捉撃滅ス　決戦時期ヲ五月中旬ト概定ス

二　指導要領

軍ノ前進開始ハ五月五日頃ト予定ス　状況ニ依リ四月末日頃以降前進ヲ開始スル場合アルヲ予期ス

軍ハ第九師団、第十三師団ヲ併列シ先ツ前面ノ敵ヲ撃破シテ迅速ニ趙家集（懐遠西北約百キロ）―蒙城ノ線ニ進出ス　此際重点ヲ左師団ニ保持ス

趙家集―蒙城ノ線付近進出後帰徳、亳県方面、碭山、永城方面、若クハ徐州方面何レニ前進スヘキヤハ状況特ニ徐州方面ノ敵情ニ即応シ之ヲ決定ス　右何レノ場合ニ於テモ一部ヲ以テ宿県付近ヲ占領セシム

派遣軍は、軍主力の作戦を容易にするため、軍主力の発進に先立ち、次の部隊の派遣を発令した。

第百一師団に対し、現在揚子江北岸に在る部隊からなるべく多くの兵力をもって阜寧（南京北々東二百二十キロ）方面に前進する。（四月二十一日発令）

第六師団に対し、速やかに歩兵四大隊基幹の部隊をもって和県（蕪湖北方四十キロ）―巣県―廬県道に沿う地区に作戦し、廬州方面の敵を抑留する。（四月二十三日発令）

派遣軍は四月十三日、蘇州付近警備の第九師団を鳳陽（蚌埠東南東二十キロ）付近に、第十三師団を蚌埠、懐遠間に集結を下令した。

第九師団（約三大隊残置）は四月中旬南京対岸の浦口に逐次集結し、敵の妨害を排除しつつ北上（列車輸送、徒歩行軍併用）し、五月三日までに鳳陽、臨淮関地区に集結した。第十三師団も五月三日までに所命地区に集結を完了した。

第六、第九、第十三、年百一師団の編成概要は次のとおりである。人名は五月一日現在のものである。

第六師団編成概要

第六師団司令部	師団長	稲葉　四郎中将	（18期）
	参謀長	重田　徳松大佐	（24期）
歩兵第十一旅団	旅団長	坂井徳太郎少将	（17期）
歩兵第十三連隊	連隊長	中野　英光大佐	（24期）
歩兵第四十七連隊	〃	長谷川正憲大佐	（24期）
歩兵第三十六旅団	旅団長	牛島　満少将	（20期）

歩兵第二十三連隊　連隊長　岡本　鎮臣大佐（22期）
歩兵第四十五連隊　〃　竹下　義晴大佐（23期）
騎兵第六連隊　〃　古賀　九蔵中佐（24期）
野砲兵第六連隊　〃　藤村　謙大佐（26期）
工兵第六連隊　〃　中村　誠一大佐（22期）
輜重兵第六連隊　〃　川真田國衛大佐（22期）
第六師団通信隊、同衛生隊、同第一～第四野戦病院

第九師団編成概要

第九師団司令部　師団長　吉住　良輔中将（17期）
　参謀長　安部　孝一大佐（26期）
歩兵第六旅団　旅団長　秋山　義兌少将（20期）
　歩兵第七連隊　連隊長　伊佐　一男大佐（23期）
　歩兵第三十五連隊　〃　寺垣　忠雄中佐（28期）
歩兵第十八旅団　旅団長　井出　宣時少将（21期）
　歩兵第十九連隊　連隊長　人見　秀三大佐（23期）
　歩兵第三十六連隊　〃　大田　貞昌大佐（23期）
　騎兵第九連隊　〃　森　吾六大佐（23期）

山砲第九連隊　〃　小堀　金藏大佐（27期）
工兵第九連隊　〃　山田　信一中佐（24期）
輜重兵第九連隊　〃　三田村正之助大佐（22期）

第十三師団編成概要

第十三師団司令部　師団長　荻洲　立兵中将（17期）
　　参謀長　吉原　矩大佐（27期）
歩兵第二十六旅団　旅団長　沼田　重徳少将（19期）
　歩兵第五十八連隊　連隊長　倉林　公任大佐（22期）
　歩兵第百十六連隊　〃　添田　孚大佐（20期）
歩兵第百三旅団　旅団長　山本源右衛門少将（20期）
　歩兵第六十五連隊　連隊長　兩角　業作大佐（22期）
　歩兵第百四連隊　〃　田代　亢俊大佐（24期）
騎兵第十七大隊　大隊長　小野　良三中佐（25期）
山砲兵第十九連隊　連隊長　横尾　闊中佐（24期）
工兵第十三連隊　〃　岩淵　經夫中佐（26期）
輜重兵第十三連隊　〃　新村　理市中佐（26期）
第十三師団通信隊、同衛生隊、同第一～第四野戦病院

第百一師団編成概要

第百一師団司令部　師団長　伊東　政喜中将（14期）
　　参謀長　西山福太郎大佐（24期）
歩兵第百一旅団　旅団長　佐藤正三郎少将（19期）
　歩兵第百一連隊　連隊長　飯塚國五郎大佐（22期）
　歩兵第百四十九連隊〃　津田　辰彦大佐（19期）
歩兵第百二旅団　旅団長　佐枝　義重少将（17期）
　歩兵第百三連隊　連隊長　谷川　幸造大佐（16期）
　歩兵第百五十七連隊〃　福井浩太郎大佐（20期）
騎兵第百一大隊　連隊長　大島　久忠中佐（23期）
野砲兵第百一連隊　連隊長　山田秀之助中佐（23期）
工兵第百一連隊　〃　八隅錦三郎中佐（24期）
輜重兵第百一連隊　〃　鳥海　勝雄中佐（24期）
第百一師団通信隊、同衛生隊、同第一～第四野戦病院

第五章　徐州作戦の概要

第二軍の敵主力抑留作戦

第十師団の敵攻勢阻止

既述のごとく、第十師団長は四月八日、台児庄方面から後退した瀬谷、坂本両支隊に対し、兵力の整理と攻撃準備を命じた。

瀬谷支隊は嶧県南東地区に主力を集結し、東、南、西から追尾攻撃する敵に対し、白山西（嶧県南方八キロ）、獐山（嶧県南東九キロ）地区の要点を占領し防禦するとともに、攻撃行動によって敵の進出を阻止した。

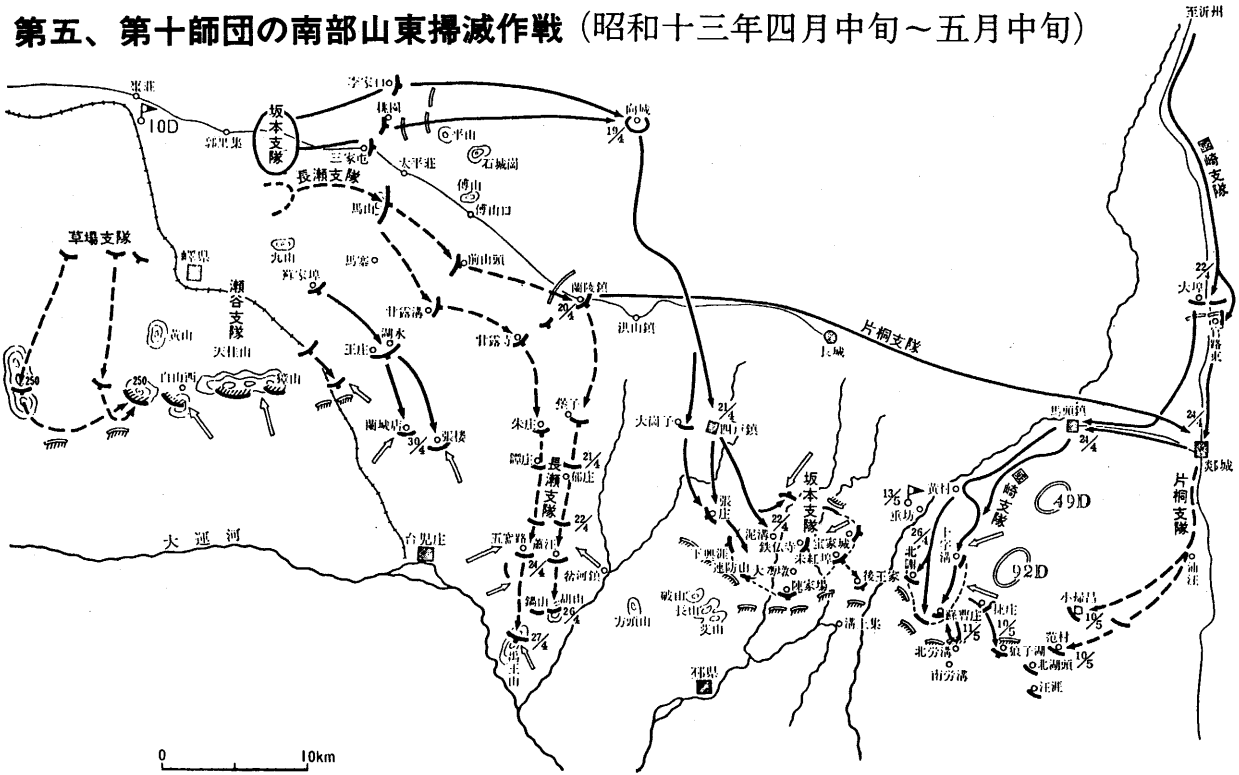
坂本支隊は嶧県北東地区に主力を集結し、主として東方及び北方から進出する敵に対し、要点を占領して防禦するとともに、攻撃行動によって敵の進出を阻止した。

両支隊は台児庄方面の戦闘により、損害も多く、疲労もはなはだしかったが、第十師団長は支隊の士気を高める見地からも、攻勢行動を要求した。

第十師団長は四月十日一〇〇〇兗州を出発し、同日二二四〇棗荘に進出して作戦指導に任じた。

日本軍の台児庄方面の後退に勢いを得た第五戦区総司令長官李宗仁は四月七日、嶧県及び沂州方面に向かう追撃を命令し、瀬谷、坂本両支隊正面、兗州方面、津浦線方面に強大な兵力を進出させた。嶧県周辺

第五、第十師団の南部山東掃滅作戦（昭和十三年四月中旬～五月中旬）



に集中してきた敵兵力は約一〇個師と推定された。

坂本支隊は四月十一日から郭里集の北東方面の敵を攻撃し、同日夕には郭里集東方約十キロ付近に進出した。しかし、優勢な敵の反撃を受け、四月十七日まで同地付近で激戦した。四月十四日、歩一一の第二大隊が嶧県から津浦線、棗荘を経て支隊に到着し、戦力が増強された。

瀬谷支隊は依然として嶧県南方地区で、昼夜を問わず来襲する優勢な敵と激戦を続けた。

第十師団の攻勢移転

方面軍は三月十五日独立混成第五旅団を第二軍に配属したが、台児庄方面の戦況から、更に四月八日第百十四師団主力を第二軍に配属した。また四月十二日、徐州作戦準備命令により、第十六師団等が第二軍に配属されたことは既述のとおりである。

第二軍は増加兵力をもって第五、第十師団の後方警備を軽減させ、両師団の第一線兵力の増加を図った。このほか、第百十四師団の約四個大隊、第十六師団の約一個大隊等を第十師団に、独立混成第五旅団の約二個大隊等を第五師団に配属した。

第十師団の後方地区の警備に任じていた長瀬支隊は、第百十四師団と逐次警備を交代し、四月十六日夕までに棗荘地区に集結して攻撃を準備した。

第十師団長は四月十五日、軍の企図に基づき、四月十八日朝から当面の敵を攻撃するに決し、十五日午前命令を下達した。攻撃部署の概要は次のとおりである。

一　師団は十八日払暁現在線付近から発進し、重点を棗荘―伝山口―蘭陵鎮道方面に保持して当面の敵

を攻撃し、一挙に台児庄、禹王山（台児庄南東八キロ）、岔河鎮（台児庄東方十二キロ）、四戸鎮（台児庄北東二十二キロ）の線に進出して南部山東の敵を掃滅する。

二　師団は北から坂本支隊（歩一一、歩二一各主力基幹）、長瀬支隊（歩三九、歩四〇各主力基幹）、瀬谷支隊（歩一〇、歩六三各主力基幹）と並列して攻撃前進、重点を長瀬支隊正面とする。瀬谷支隊は当初現態勢をもって敵を牽制するとともに、長瀬支隊の攻撃進展に呼応して攻撃に転ずる。

四月十八日払暁から坂本支隊及び長瀬支隊は攻撃を開始し、両支隊は同日夕刻、大平荘南北の線に進出した。

瀬谷支隊は長瀬支隊の攻撃前進に伴い、十八日午後から歩六三主力をもって攻撃を開始したが、歩一〇主力は依然として防禦に任じた。

十九日、坂本支隊正面の敵は退却を開始し、同支隊は追撃に移り、同夜、向城に進出して同地守備隊（騎兵第五連隊基幹、坂本支隊所属）を掌握した。

長瀬支隊は十九日夕、蘭陵鎮西方約十二キロ付近に進出して蘭陵鎮方面に向かう攻撃を準備した。

瀬谷支隊の攻撃隊（歩六三主力）は十九日午前、嶧県東方十キロ付近に進出した。瀬谷支隊長は第十九、歩一〇主力に対し、一部をもって白山西（嶧県南方七キロ）及び獐山（嶧県南東九キロ）付近を守備させ、主力をもって台棗鉄道に沿う地区を攻撃前進することを命じた。歩一〇主力は十九日午後から攻撃を開始したが、正面の敵（第六師等）の抵抗は頑強で、獐山東方で二～三キロを前進し得たにすぎなかった。

坂本支隊は向城の守備を騎兵連隊に代えて歩兵第二十一連隊第三大隊（約二個中隊欠）を残置し、支隊

主力は二十日未明向城を出発し、洪山鎮東方地区の敵陣地を攻撃するため南下したが、同地付近の敵は退却を開始した。支隊は同夜から岔河鎮、四戸鎮に向かって追撃に移り、二十一日夜四戸鎮付近に進出した。支隊は一部を四戸鎮に残置し、方頭山（四戸鎮南南西十四キロ）及びその東方の艾山の線に向かって追撃を続行した。

坂本支隊は二十二日午前泥溝（四戸鎮南々東八キロ）地区に進出し、艾山方面の攻撃を準備したが、東方及び北東方面から有力な敵の反撃を受けるとともに、南方及び西方からも妨害を受けた。支隊はこれらの反撃作戦に連日苦闘した。坂本支隊は五月六日第十師団長の指揮下から第五師団長の指揮下に復帰するが、敵の反撃は活発で、五月十四日まで連日苦闘を続け、坂本支隊の損害は甚大であった。

長瀬支隊は敵を撃破して四月二十日夜、蘭陵鎮及びその南西地区に進出し、敵の退却に伴い追撃南下して二十二日夕、蘭陵鎮南方約十キロの地区に進出した。支隊は逐次強化する敵の抵抗と反撃を撃破し、二十四日蕭汪付近に進出し、二十六日胡山（台児庄東南東九キロ）を、二十七日禹王山（台児庄南東八キロ）を占領した。しかし、胡山、禹王山方面及び支隊の側背に対する敵の反撃行動は活発で、五月十二日まで連日激戦が続き、支隊の損害も二十六日までに死傷約千五百名となった。

第十師団右翼の瀬谷支隊当面の敵は依然として頑強に抵抗し、瀬谷支隊の攻撃は、大きな進展は見られず停滞ぎみであった。支隊の右側（西側）の白山西方面の守備部隊は絶えず有力な敵の攻撃を受けて苦闘を続けた。

瀬谷支隊の左翼は四月末、蘭城店（嶧県南東十八キロ）付近に進出したが、戦線は膠着状態となった。

津浦線の沿線地区に対する敵の遊撃行動も活発で、同方面警備の第百十四師団は各所で掃討作戦を続けた。

草場支隊の増加

第十師団の攻勢移転は、前述のごとく四月末には各支隊の戦線は膠着状態となり、多数の敵（当時三〇個師以上と推定）の抵抗と反撃をうけ、苦戦状態となった。わが第一線部隊通過後の後方地区に敵は再侵入し、戦線は混戦状態となり、後方連絡線の保持も困難を極めた。

第十師団長は四月二十二日、棗荘から蘭陵鎮に進出して作戦を指導したが、第一線の指導のほか、後方地区に侵入してくる敵の対応策にも多忙であった。

第二軍は四月二十七日、第十師団に配属中の歩兵第百五十連隊の歩兵約一大隊（在蘭陵鎮）を第五師団長に配属し、第十六師団の歩兵第十九旅団長草場辰己少将（20期）の指揮する歩兵第二十連隊、野砲兵第二十二連隊第一大隊を基幹とする部隊（軍予備、在棗荘）を第十師団長に配属した。

第十師団長は四月二十八日、右翼の瀬谷支隊方面の戦況を考え、配属部隊で草場支隊を編成し、同支隊に瀬谷支隊の右側から台児庄西方地区に向かい攻撃前進することを命じ、右翼方面からの戦況進展を図った。

第二軍は四月二十九日、岡本参謀を第百師団長の下に派遣し、「現在の戦線を確保し、次期作戦を準備」すべき旨の軍命を伝達し、第十師団は五月十日ころから移動を開始し、微山湖西方地区から徐州方面に攻撃前進する計画であることを伝えた。

草場支隊は四月二十九日、嶧県西方地区に移動し、三十日払暁から、白山西の西方に並ぶ二つの二五〇高地（嶧県南西八キロ及び十三キロ）の線に向かって攻撃前進し、同日正午ころ両二五〇高地線に進出した。

草場支隊はさらに南下攻撃したが、前面の敵陣地が堅固なうえ、敵の反撃兵力は逐次増加し、五月三日以後は白山西地区で優勢な敵の包囲攻撃をうけて前進困難となり、逆に防勢に立つ状態となった。

草場支隊は五月九日第十師団の配属を解かれ、第十六師団長の指揮下復帰となり、済寧方面に転進した。（第十六師団主力は五月九日から攻勢発起―後述）

第二軍は五月七日、第十師団に「師団は当面の敵を抑留し、機を見て微山湖西方に転進するため、兵力の転用を準備」すべきことを命じた。

第十師団長は、混戦状態にある師団の現況からして、兵力転用には相当の困難を予想したが、五月十日長瀬支隊長に、十一日瀬谷支隊長に軍の企図を示して転進の準備を命じた。また、工兵部隊などに微山湖渡湖のための偵察及び準備を命じた。

第五師団の沂州攻略と南下

第五師団長（板垣征四郎中将）は三月三十一日湯頭鎮に進出し、次いで沂州北西の義堂集に進出した。沂州地区には依然強大な敵が存在し、坂本支隊の残置部隊が監視に任じていた。

四月上旬、坂本支隊の後方連絡線が遮断され、朱陳（沂州南西十六キロ、歩四二第三大隊基幹所在）及び向城（騎兵第六連隊基幹所在）は敵の包囲攻撃をうけつつあった。坂本支隊が四月八日、第十師団長の指揮下に入ったことは既述のとおりである。

第五師団長は四月七日、独立混成第五旅団の独立歩兵第十七、第二十大隊の配属をうけ、さらに四月十一日、第百十四師団の歩兵第百五十連隊第一大隊等の配属をうけて、これら部隊に膠済線沿戦地区の警備を交代させ、歩兵第四十一、第四十三連隊の各主力等を沂州地区へ進出させるように部署した。

歩兵第九旅団司令部及び歩兵第五十一連隊主力は四月十一日、歩兵第四十二連隊主力は四月十四日夜、それぞれ義堂集地区に進出した。

第五師団長は四月十四日、「國崎支隊長ハ沂州付近ノ敵ニ対シ速ヤカニ行動ヲ開始シ遅クトモ十九日朝迄ニ同地ヲ攻略確保シ向城ニ向フ前進ヲ準備スヘシ」と命令した。

國崎支隊の兵力編組は次のとおりである。

支隊長　國崎少将、歩兵第九旅団司令部、歩四一（第二、第五、第八、第九中隊欠）、歩四二（第六、第八中隊、第三大隊欠）、野砲兵第五連隊第二・第三大隊（一個小隊欠）・連隊段列半部、独立山砲兵第三連隊（一個中隊と一個小隊、連隊段列半部欠）、工兵第五連隊（第二中隊〈一個小隊欠〉欠）、衛生隊三分の一、輜重兵一中隊（一個小隊欠）

國崎支隊は四月十六日午後から沂州地区の敵陣地の攻撃を開始したが、敵の抵抗は頑強であった。昼夜連続の猛攻により、城外陣地を逐次攻略し、十九日一〇三一ころ沂州城城壁の一角を占領し、夜までに城内の掃討を完了した。敵主力は南方及び東方に退却したが、沂州南側地区の残敵は依然として抵抗を続けた。

これより先、向城守備隊は四月四日以来、敵の包囲攻撃をうけ、一時危殆に陥ったが、義堂集から林田

支隊（歩四一第一大隊基幹）が派遣（十二日）され、十四日向城部隊に連絡と補給を実施することができた。林田支隊は十五日夜義堂集に帰還した。

第五師団長は十九日午後、沂州付近の掃討を実施するとともに、國崎支隊に一部をもって敵を急追し、郯城（沂州南方六十キロ）付近を占領させ、主力をもって第十師団の作戦に策応することを下令した。第十師団が十八日朝から攻勢に転じたことは前述のとおりである。

國崎支隊は十九日、先遣隊（歩四二第一大隊、山砲一個中隊基幹）を沂州―郯城道を馬頭鎮（郯城西方八キロ）に向かい急進させ、主力は速やかに沂州付近を掃討して前進しようとしたが、沂州南側方面の敵の頑強な抵抗に遭い、南進は容易でなかった。

四月十九日、歩兵第四十二連隊長の指揮下に復帰した朱陳守備隊は、二十日沂州帰還の途中で敵の包囲攻撃を受けたため、歩四二主力は救援に向かい、これを援護して二十一日沂州に帰還した。

二十二日に至り、國崎支隊は一部（歩四一第一大隊、砲兵一個中隊基幹）を沂州に残置し、支隊主力は沂州を出発し、まず郯城に向かい前進した。先遣隊は十九日夕、沂州を出発し、所在の敵を撃破して、二十二日夕には大埠（郯城北方十キロ）に達し、同地南側の敵陣地の攻撃を開始した。

二十三日、國崎支隊は主力を展開して攻撃し、同日夕刻、大埠南側の敵を撃破して夜間追撃に移った。

歩兵第四十二連隊は奇襲攻撃によって、二十四日〇五四五郯城北門を占領し、〇八四〇には城内の掃討を完了した。支隊は一部（歩四二の一個中隊）を郯城警備に残置し、主力は所在の敵を撃破して二十四日夕、馬頭鎮（郯城西方八キロ）を占領した。

北労溝地区の苦闘

國崎支隊は溝上集（馬頭鎮南西二十キロ）付近占領の目的をもって四月二十六日未明、馬頭鎮を出発して南西進し、所在の敵を撃破して同夜、北労溝（馬頭鎮南南西十七キロ）北方十二キロ付近に進出した。

次いで二十七日夕、北労溝北方二キロ付近に進出して北労溝付近の攻撃を準備した。北労溝東西地区の敵陣地は部落の城壁等を利用した堅固なものであった。

國崎支隊は四月二十八日から北労溝付近の敵陣地の攻撃を開始したが、頑強な抵抗と有力な反撃を受け、死傷者も多く攻撃は進展しなかった。

二十九日からは、國崎支隊は東方及び北方からも反撃を受けて苦戦に陥った。支隊の後方連絡線は遮断されて弾薬、糧秣は欠乏し、しかも補給の見込みもたたない状況で、死傷続出して戦力は極度に低下した。

國崎支隊の歩兵第四十一、第四十二連隊は沂州攻撃以来兵員の補充がなく、損害の累計は各中隊六〇～七五％に達し、連隊の実力は一個大隊以下となっていた。

第五師団長は二十九日郯城に進出したが、増援する手持ち兵力はなかった。五月六日に至り、補充兵員として、歩兵第四十一連隊に四七一名、歩兵第四十三連隊に六九〇名が戦場に到着した。

國崎支隊長は三十日夕、戦線整理を決心し、北労溝方面の陣地攻撃を中止し、一部をもって現第一線を保持させ、主力を北労溝北方一～七キロ地区に集結し、各方面から反撃する敵を撃破しつつ爾後の攻撃を準備した。

このころ、國崎支隊の西側地区では第十師団に配属された坂本支隊が優勢な敵と苦闘中であった。

第二軍は第五師団方面の戦況の進展を図るため、四月二十七日歩兵第百五十連隊の約一個大隊、三十日大槻部隊（歩兵第三十八連隊第三大隊〈約一個中隊欠〉、野砲一個中隊基幹）、五月三日片桐支隊（歩兵第九連隊長片桐護郎大佐〈20期〉の指揮する歩九〈第三大隊欠〉、野砲一個大隊基幹）を第五師団に配属した。以上の部隊は軍予備隊として蘭陵鎮付近に所在していた。

第五師団長は、歩兵第百五十連隊の大隊を沂州警備に充て、同地警備の歩兵第四十一連隊第一大隊などを前線に追及させ、大槻部隊に郯城への前進を命じた。

大槻部隊は五月二日郯城に到着し、国崎支隊との連絡の命を受け、三日郯城を出発（輜重兵二個中隊同行）して五日朝、重坊（馬頭鎮南西十一キロ）に進出し、國崎支隊と連絡して補給した。次いで八日郯城に帰還して片桐支隊長の指揮下に入った。

片桐支隊は蘭陵鎮付近から東進し、所在の敵を撃破して五月七日（推定）郯城に到着した。

なお、第二軍は四月二十九日、膠済沿線などの北部山東省の警備を独立混成第五旅団に担任させ、第五師団の残置兵力（約四個中隊）を前線に推進させた。残置部隊は残置兵力（約四個中隊）を前線に推進させた。残置部隊は五月六日、国崎支隊に追及した。

國崎支隊は五月一日～九日の間、数個師の反撃を撃退しつつ、戦力充実を図り、攻撃を準備した。四月二十六日～五月十五日の間の歩兵第四十一、第四十二連隊の損害人員は次のとおりである。

歩四一　戦闘参加二、五〇一　戦死一九六　戦傷五五三

歩四二　戦闘参加一、八八九　戦死二〇九　戦傷四四三

片桐支隊の攻撃

第五師団長は五月七日、片桐支隊（大槻部隊配属）に対し、八日夜郯城付近を出発、浦汪（郯城南方六キロ）方面から小帰昌（郯城南西十三キロ）を攻撃し、さらに飲馬庄（北労溝南東六キロ）方向に前進し、國崎支隊当面の敵の右側背を攻撃すべきことを命じた。

片桐支隊は八日夜、郯城から南下し、九日夕には小帰昌付近に進出、攻撃を続行して十日、北湖頭（北労溝東南東五キロ）に進出した。

第二軍は五月十日、片桐支隊（大槻部隊を除く）の第五師団配属を解き、第十六師団に復帰を命じた。このため、第五師団長は十一日大槻部隊を國崎支隊に配属し、北湖頭付近を守備させた。片桐支隊は十一日、戦線を離脱して第十六師団主力に追及するため急進した。

國崎支隊は片桐支隊の攻撃に連係し、十日朝から北労溝及び東方地区の攻撃を開始し、同日夕刻、狼子湖（北労溝東方五キロ）を占領した。さらに攻撃を続行して十一日朝、北労溝を完全占領したが、敵の集中砲火による損害が多いため、北労溝を放棄後退する状況となり、戦線は膠着した。

坂本支隊の第五師団復帰

四月八日以来第十師団長の指揮下にあった坂本支隊は、四月二十二日泥溝付近に進出したが、優勢な敵の反撃を受けて苦闘を続けつつあったことは既述のとおりである。

第二軍は五月六日、坂本支隊（配属部隊とも）を第五師団に復帰させた。第五師団長は七日、坂本支隊に対し、前任務の続行を命ずるとともに、独立軽装甲車第十二中隊及び野戦重砲一中隊を坂本支隊から國

崎支隊へ配属替えをした。

坂本支隊は、支隊東側の國崎支隊との中間に侵入した敵（第三、第九師）を攻撃するとともに、長山方面に対する攻撃を準備した。

第五師団長は五月十二日夕、坂本支隊配属の歩兵第十一連隊主力（第三大隊欠）、野砲兵第五連隊本部及び同連隊第四大隊を國崎支隊に配属替えをした。第五師団戦闘司令所は五月十三日重坊に進出した。

独立軽装甲車第十二中隊（長　久納清之助中尉、工兵一個小隊配属）は五月十四日、隴海線遮断のため挺進して同日一〇〇〇ごろ、瓦窰駅（郯城南南西二十七キロ）東側で三ヵ所を爆破して捷庄（郯城南西十八キロ）に帰還した。

関東軍からの応急派兵

大本営は徐州方面の敵兵力の増加を考慮して、五月十日の大陸命をもって関東軍から混成二個旅団等を北支に派遣し、北支那方面軍司令官の指揮下編入を発令した。方面軍は十一日これを第二軍に配属した。

混成旅団の編成概要は次のとおりである。

混成第三旅団（長　田村元一少将〈18期〉、第二師団編成）

歩兵第三旅団司令部、歩兵第四連隊、歩兵第二十九連隊、野砲兵第二連隊（二個大隊欠）、工兵第二連隊の一個中隊、師団通信隊（半部欠）　　総計約四千九百名

混成第十三旅団（長　森田正範少将〈24期〉、第七師団編成）

歩兵第十三旅団司令部、歩兵第二十五連隊、歩兵第二十六連隊、野砲兵第七連隊（二個大隊欠）、工兵

第七連隊の一個中隊、師団通信隊（半部欠）、臨時病馬班　総計約五千二百名

右のほか、自動車第十一・第十二中隊、関東軍第三・第四衛生班、第二・第七臨時病馬班が派遣された。

北支那方面軍は五月十日、平山支隊（支那駐屯兵団の歩兵三個大隊、山砲兵一個中隊基幹）を第二軍に配属し、第一軍の黄河渡河援護部隊（酒井支隊、歩兵四個大隊基幹）を鄆渉城攻略とともに第二軍に配属することを下令した。第二軍は両部隊を第十六師団に配属した。

第二軍の徐州作戦発動と作戦指導

第二軍の準備命令

北支那方面軍は四月二十三日、徐州作戦に関する方面軍命令を下達した。

第二軍は四月二十九日に至り、左記の徐州作戦の準備命令（要旨）を下達した。

一　軍は速やかに徐州方面の敵軍を撃破して徐州占領を企図する。

二　第五、第十師団は現進出線付近の要地を確保し、随時敵の反撃を破砕しつつ攻勢を準備。

三　第十六師団は曲阜、済寧付近に集結して前進準備。

四　第百十四師団及び独力混成第五旅団は軍後方地域警備の現任務を続行し、第一線兵団の前進に伴う警備地域の推進を計画、準備。

右命令とともに、第二軍は次の作戦計画を各兵団に指示した。

一　第五師団は現進出方面から徐州東方に攻撃。
二　第十師団は五月十日ころから微山湖西方に転進して攻撃。現在の第十師団正面は第百十四師団をもって警備せしめる。
三　第十六師団は済寧付近から南下攻撃。

第二軍は右の命令下達後、第五師団方面の戦局打開のため、四月三十日大槻部隊を、五月三日片桐支隊を第五師団に配属し、坂本支隊を第五師団に復帰させたことは既述のとおりである。また、第二軍は警備地区の変更、微山湖の渡湖準備など作戦準備を進めた。

四月三十日、東久邇宮稔彦王殿下が新たに第二軍司令官に親補され、五月五日済南に着任された。

第二軍の徐州作戦発動

中支那派遣軍の徐州作戦部隊主力は五月五日から北上を開始した。第二軍は五月七日、戦闘司令所を済南から兗州に進め、次のごとく徐州作戦発動を命令（要旨）した。

一　第十六師団は五月九日済寧付近を出発、当面の敵を撃破して速やかにまず、碭山、唐寨方面に進出。
二　第十師団は当面の敵を抑留し、作戦の進展に伴い逐次臨城付近に転進する準備。
三　第五師団は当面の敵を抑留し、作戦の進展に伴い徐州東方地区に向かう前進を準備。
四　第十六師団の前進に伴う警備地区の変更。

第二軍は既述のごとく、五月九日第十師団配属の草場支隊を、五月十日第五師団配属の片桐支隊をそれぞれ第十六師団に復帰し追及させた。両支隊は五月十日～十二日師団に追及した。

第十六師団の攻撃

第十六師団（長　中島今朝吾中将）は五月九日済寧付近を出発し、所在の敵を撃破し同日夕胡家集北方地区に進出した。次いで十一日金郷北方に進出して金郷付近の攻撃を準備した。この日、第十四師団の酒井支隊が第十六師団長の指揮下に入った。

第十六師団長は十三日夕、今田支隊を編成し、同支隊に隴海線の遮断を命じた。今田支隊（戦車第二大隊長今田俊一大佐指揮の戦車第二大隊、歩兵第九連隊第一大隊、野砲兵一個中隊、工兵一個小隊基幹、車載）は十四日零時、郷茂海（金郷北東十三キロ）を出発、魚臺東方―豊県西側を急進し、途中の敵を撃破して十五日朝、隴海線に達した。

今田支隊は敵の妨害を排除して十五日〇八四〇～一〇〇〇の間に、汪閣（唐寨）を占領し、同日師団主力の進出に伴い支隊編成が解かれた。

第十六師団主力は十四日金郷を占領して南下し、十八日謝場（徐州西北西二十二キロ）に進出して徐州攻撃を準備し、十九日九里山（徐州北西四キロ）を攻略して徐州北側を経て徐州北東に向かい追撃した。

配属された酒井支隊は五月十一日夜、鄆城を占領し、金郷方面に南下、十三日柳林集（曹州東南東四十五キロ）北東地区、十四日大田集（柳林集南東十キロ）、十五日城武（金郷西方三十五キロ）南東地区に進出した。十五日、酒井支隊は第十四師団長の指揮下復帰が下令された。

第十師団の微山湖西方転進

第二軍は五月十二日、第十師団正面に第百十四師団の一部を推進し、第十師団主力を嶧県、蘭陵鎮の地

区に集結することを命じた。

第二軍は十四日、徐州方面の敵軍動揺の兆しがあることを知り、第十師団に対し、台児庄（含まず）以東に在る部隊（歩兵第四十連隊長西大條胖大佐指揮の歩四〇、野砲一個大隊基幹、「西大條支隊」と称す）を残置して第五師団長の指揮下に入らしめ、台児庄（含む）以西の第一線を第百十四師団と交代し、師団主力は夏鎮（臨城西方十二キロ）付近で微山湖を渡湖し、速やかに郝家集（徐州西北西三十二キロ）、郝寨（徐州西方十八キロ）付近に進出することを命じた。

第十師団は十四日から、第百十四師団の奥地区隊（歩兵第百二十八旅団長奥保夫少将指揮の歩兵六個大隊、師団砲兵及び工兵連隊主力基幹、韓荘部隊〈歩一〇第三大隊主力〉配属）と逐次守備を交代して臨城付近に集結した。

第二軍首脳は、第十師団の速やかな渡湖を督促した。中支那派遣軍の北進状況などから作戦軍主力の第二軍としては速やかに徐州を占領したい気持ちであった。

第十師団の先遣部隊は十五日夜半、渡湖を開始し、十六日未明対岸に上陸して付近を掃討した。

大本営の作戦地境指示と急進撃

十五日、大本営は北支那方面軍と中支那派遣軍との作戦地境を隴海線及び奎河（徐州東側を北流）の線（線上は北）と定めた。

方面軍は五月十六日、左の命令（方面軍作命甲第三一二号抜粋）を下達した。

二　方面軍ハ徐州付近ニ向ヒ敵ヲ圧迫撃滅セントス

三　第二軍ニ捷路ヲ一意徐州及南方地区ニ向ヒ敵ヲ急追捕捉スヘシ

為之微山湖以西ノ地区ヨリ行動スル兵団ヲシテ隴海線以北ノ地区ヲ徐州ニ向ヒ前進、又徐州東方ヨリ行動スル兵団ヲシテ奎河ノ線ニ向ヒ急進セシムヘシ

四　第一軍ハ第十四師団ヲシテ蘭封東方ニ於ケル鉄道遮断ノ成果ヲ確保セシムルト共ニ主力ヲ以テ帰徳方面ニ行動シ第二軍ノ右側背ニ対スル敵ノ策動ヲ破砕セシムヘシ

第二軍は五月十六日、敵は全面的に動揺の兆候があるが、大部の敵はまだ徐州東方地区に所在すると判断し、軍主力を徐州西方地区に進めて爾後の攻撃を準備するため、第十六師団、第十師団に対し、速やかに謝場―玉皇嶺の線に急進することを命じた。第十六師団は既述のごとく、十六日唐寨西方に、十九日には徐州北側に進出した。

第十師団は十六日以来、沛県を攻撃したが攻略できなかった。十七日一部をもって沛県攻略に充て(十九日占領)、主力は十八日沛県東方地区を出発し南下、十九日徐州北方六キロ付近に進出した。

第二軍戦闘司令所は五月十八日臨城に進出した。

第五師団の追撃作戦

隴海線に沿って麦また麦の中を前進する我第三十三連隊

第五師団の戦線は五月上旬以来膠着していたが、國崎支隊の歩兵第四十二連隊の将校斥候は五月十五日未明、南労溝北門に到着し、敵が退却したことを発見した。これにより、第五師団（西大條支隊を属す）は直ちに追撃に移り、十五日夕、各支隊はおおむね大運河左岸に進出した。師団長は十五日夕、「師団ハ概ネ現在ノ態勢ヲ以テ一挙ニ徐州東南側ニ向ヒ敵ヲ急追セントス」と下令した。

運河付近の敵の抵抗は頑強で、國崎支隊は十七日夜、坂本支隊及び西大條支隊は十八日昼間、それぞれ敵の抵抗を排除して渡河し、徐州南東方に追撃した。

師団命令に基づき、國崎支隊は十八日、歩四二第三大隊長鈴木茂一郎少佐指揮の快速部隊（歩四二第三大隊〈一部欠〉、支那駐屯兵団戦車隊、独立軽装甲車第十二中隊、野砲一個中隊基幹、車載）を宿県付近に挺進させた。

鈴木快速部隊は二十日尹集（双溝南西二十五キロ）で敵第二二軍司令部を急襲し、軍長譚道源中将を捕捉（負傷後死去）した。軍長の態度は武人らしく立派であった。

第五師団主力は十九日双溝地区に進出し、宿県北東方地区に敵を急追せよの軍命令を受領した。師団は敵を撃破して南西進し、二十日主力は貢山集（宿県北東五十キロ）欄杆集（貢山集北西十キロ）地区に進出し、二十一日先頭は路疃集（宿県北東三十キロ）に進出した。

第百十四師団の追撃

第百十四師団は五月十三日から逐次第十師団と配備を交代し、十六日ころ完了した。師団長は十六日、兗州から棗荘に進出した。

第百十四師団の編成概要は次のとおりである。人名は五月中旬のものである。

第百十四師団司令部　師団長　末松　茂治中将（14期）
　　参謀長　磯田　三郎大佐（25期）
歩兵第百二十七旅団　旅団長　秋山光三郎少将（18期）
歩兵第六十五連隊　連隊長　山田　常太中佐（24期）
歩兵第百二連隊　〃　千葉小太郎大佐（21期）
歩兵第百二十八旅団　旅団長　奥　保夫少将（17期）
歩兵第百十五連隊　連隊長　矢ヶ崎節三中佐（27期）
歩兵第百五十連隊　〃　山本　重悳中佐（23期）
騎兵第百十八大隊　大隊長　天城幹七郎少佐（27期）
野砲兵第百二十連隊　連隊長　大塚　昇中佐（25期）
工兵第百十四連隊　〃　野口勝之助少佐（28期）
輜重兵第百十四連隊　〃　中嶋　秀次中佐（26期）
第百十四師団通信隊、同衛生隊、同第一～第三野戦病院

第百十四師団長は五月十七日、奥部隊（歩一〇二主力、歩一一五〈第三大隊欠〉、歩六六第三大隊主力、砲兵連隊主力、工兵連隊主力基幹）に対し、当面の敵を撃退して大運河南側高地に向かう攻撃を命じ、歩兵第百二十七旅団長秋山少将に対し、北部地区の警備を統一指揮することを命じた。

奥部隊は十八日嶧県地区から攻撃前進し、敵を撃退して同日夕には台児庄西方の大運河北岸に達し、直ちに軽架橋により渡河を開始した。師団長は十九日、奥部隊に大泉（徐州北東三十五キロ）付近への追撃を命じた。

奥部隊は二十日大泉に進出し、同日師団長も同地に進出した。同日夕「第百十四師団は徐州に急進し、同地付近を確保し、爾後の攻撃を準備すべき」軍命令を受領した。師団長は奥部隊に徐州急進を命じた。奥部隊は五月二十日夜、胡里爾（徐州北東二十五キロ）付近に進出、一部は徐州東方二十キロ付近に進出した。次いで二十一日夕までに主力を徐州付近に集結し、徐州を占領している第十三師団と協定して徐州地区の警備についた。

第二軍の徐州作戦準備と黄河渡河

第一軍は四月十二日の北支那方面軍命令（前述）に基づき、徐州作戦の準備に着手した。第一軍は既占拠地の治安粛正に任じており、第十六師団の抽出と第十四師団の徐州作戦参加により、配備を大きく変更した。

第一軍作戦準備命令

第一軍は四月十五日、左記軍命令をもって作戦準備を命じた。

一軍作命甲第二二七号〔抜粋〕　四月十五日

一　北支那方面軍ハ近ク中支那派遣軍ノ一部ト協力シ徐州付近ノ敵ヲ撃滅スルノ企図ヲ有ス　準備完成ノ時機ハX日ト予定ス（X日ハ後日命令セラル）

二　軍ハ已占領地域ヲ確保スルト共ニ一部ヲ以テ蘭封付近ヨリ下流ニ於テ黄河ヲ渡河シ第二軍ノ作戦ヲ容易ナラシムルノ準備ヲ為サントス

三　第二十七師団〔山西省南部所在〕ニ前任務ヲ続行スヘシ

四　第百八師団〔従来潞安地区の警備〕ハ懐慶平地及獲嘉、修武付近ヲ守備シ且黄河ノ線ヲ警戒スヘシ

五　独立混成第四旅団ハ湯陰、輝県、新郷、道口鎮間ノ地区ヲ守備スヘシ

六　第十四師団〔従来は黄河以北の河南省警備〕ハ蘭封、范県間ノ地区ニ於テ黄河ヲ渡河シ蘭封付近ニ進出スルノ準備ヲ為スヘシ　詳細ハ別命ス

七　第百九師団〔大原及び北部山西省警備〕ハ前任務ヲ続行スヘシ

八　独力混成第三旅団ハ高邑、彰徳間ノ地区竝大名、臨清付近ヲ守備スヘシ

軍隊区分の概要は次のとおりである。

第二十師団（長　川岸文三郎中将）

配属部隊　独立山砲兵第一連隊、独立野戦重砲兵第八連隊

第一大隊、高射砲一隊

第百八師団（歩兵一個大隊欠）（長　下元熊彌中将）

配属部隊　独立機関銃第九大隊、独力山砲兵第三連隊第二大隊、野戦重砲兵第六連隊第二大隊、高射砲一隊

独立混成第四旅団（歩兵二個大隊欠）（長　河村董少将）

第十四師団（長　土肥原賢二中将）

配属部隊　独立機関銃第五大隊、独立軽装甲車第一中隊、野戦重砲兵第二旅団（野戦重砲兵第六連隊及び旅団輜重半部欠）、独立野戦重砲兵第八連隊（第一大隊及び連隊段列半部欠）、迫撃第五大隊、独立気球第一中隊、高射砲二隊、独立工兵第四連隊、独立工兵第一連隊第一中隊（戊）、第二師団第一架橋材料中隊、第十四師団架橋材料中隊、第十六師団第二渡河材料中隊（軽渡河材料）、架橋材料一個中隊分、折畳舟約百五十隻

〔四月十九日独立工兵第二連隊を配属〕

第百九師団（長　山岡重厚中将）

配属部隊　独立機関銃第四大隊、独立軽装甲車第五中隊、迫撃第三大隊、高射砲一隊

独立混成第三旅団

配属部隊　第九師団後備歩兵第三大隊、第十四師団後備歩兵第一大隊、近衛師団後備騎兵第四中隊、第十師団後備野砲兵第二中隊、高射砲一隊

石家荘防衛区司令官

配属部隊　第百八師団の歩兵一個大隊、第八師団後備歩兵第三大隊

軍直轄部隊　第一軍通信隊、地図小隊、写真班

第一軍は方面軍の認可を得て四月十九日、第十四師団の黄河渡河援護のため、同師団の一部を第二軍の作戦地域内の済寧付近に列車輸送し、黄河右岸を済寧―嘉祥―鉅野―鄆城を経て臨濮集付近に進出して、

師団主力の渡河援護を命じた。

第十四師団の編成概要は次のとおりである。人名は五月中旬のものである。

第十四師団司令部	師団長	土肥原賢二中将	(16期)
	参謀長	佐野　忠義大佐	(23期)
歩兵第二十七旅団	旅団長	豊嶋房太郎少将	(22期)
歩兵第二連隊	連隊長	横山　静夫大佐	(24期)
歩兵第五十九連隊	〃	那須　弓雄大佐	(25期)
歩兵第二十八旅団	旅団長	酒井　隆少将	(20期)
歩兵第十五連隊	連隊長	井上　靖大佐	(26期)
歩兵第五十連隊	〃	遠山　登大佐	(23期)
騎兵第十八連隊	〃	安田　兼人中佐	(23期)
野砲兵第二十連隊	〃	宮川　清三大佐	(25期)
工兵第十四連隊	〃	岩倉　夘門大佐	(20期)
輜重兵第十四連隊	〃	今村　武雄中佐	(26期)

第十四師団通信隊、同衛生隊、同第一～第四野戦病院、同兵器勤務隊、同病馬廠

渡河援護部隊の酒井支隊（酒井隆少将指揮の歩一五、歩五〇の一個大隊、独立機関銃第五大隊〈一個中隊欠〉、騎兵第十八連隊主力、野砲兵第二十連隊第三大隊、野戦重砲兵第五連隊〈一個大隊欠〉、独立軽装

甲車第一中隊、工兵一個中隊基幹）は四月二十八日から新郷を出発し、五月八日済寧に集結した。

第十四師団の黄河渡河

第一軍は五月九日、第十四師団に対し、左記の渡河命令を下達した。

第十四師団ハ渡河準備ノ完成ニ伴ヒ随時黄河ヲ渡河シ蘭封、帰徳ノ間ニ於テ隴海鉄道ヲ遮断スルト共ニ機ヲ見テ蘭封付近ノ要地ヲ確保スヘシ

ところが、前述のごとく五月十日、酒井支隊を第二軍に配属する左記方面軍命令をうけた。

一　酒井支隊ハ鄆城攻略ト共ニ第二軍ニ配属ス

二　第一軍司令官ハ酒井支隊ノ援護ヲ待ツコトナク第十四師団主力ヲシテ直チニ黄河ヲ渡河シ原任務ヲ実行セシムヘシ

第一軍は方面軍命令に基づき十日、改めて第十四師団の渡河を命令したが、師団の任務は変更しなかった。

第十四師団は、渡河を五月十二日と予定していたが、十一日に「蘭封付近の敵北上」の飛行隊通報を受け、師団長は十一日夜に渡河を実行するに決した。

第十四師団主力は十一日夜、嶧県南方の黄河沿岸に進出し、十二日〇二〇〇渡河を開始し、敵（第二三師）の抵抗を排除して渡河に成功し、〇三四〇菫口東西の線に進出した。渡河作戦の損害は戦死八、負傷三二であった。第十四師団は敵を撃退して十四日曹州を占領した。

渡河援護の酒井支隊は十一日鄆城を占領し、第二軍（第十六師団）に配属されたが、騎兵第十八連隊を

師団主力方面に前進させ、支隊主力は金郷方面に南下した。

騎兵第十八連隊（独立軽装甲車第一中隊属）は十五日〇七二〇、内黄（蘭封東方十五キロ）付近で隴海線を爆破遮断し、考城（蘭封北東二十キロ）東方に位置した。

第十四師団主力は十五日曹州地区で、爾後の作戦を準備した。この日、方面軍命令で酒井支隊が師団の隷下に復帰し、同支隊は城武南東地区から転進し、十八日内黄付近に到着して師団主力と合した。

第十四師団の帰徳転進問題

北支那方面軍は五月十六日、第二軍に対し、第十四師団主力を帰徳方面に行動させて第二軍の作戦に協力することを命じた。（命令既述）

第一軍は、当面の敵情からして、蘭封方面の敵を解決したのち、帰徳方面に転進させることとし、第十四師団に対し、蘭封付近要地を確保したのち帰徳方面への転進を準備すべきことを命じた。第十四師団は十七日夕、内黄東方地区に進出して蘭封攻略を準備した。

方面軍は十八日、第二軍に対して帰徳攻略を、第一軍に対して重ねて、第十四師団を第二軍の帰徳攻略に協力させることを、命令（後述）したが、第一軍は前方針のとおりとして処置しなかった。

第十四師団を帰徳方面に作戦させることは、徐州方面の敵を包囲する大本営の意図でもあった。

第一軍が蘭封攻略に執着したことは、当面の敵情判断のほか、第二軍首脳が開封攻略を期待していた心情が相当強かったと推定される。

蘭封攻略

蘭封南東方に進出して攻撃準備中の第十四師団は、十九日朝から考城及び内黄西方から敵約三個師の攻撃を受けたが午後には撃退した。師団は二十一日、蘭封―杞県にわたる敵陣地を蘭封南方地区で突破し、蘭封西方に進出したのち、二十四日蘭封を占領した。第十四師団に対する敵の反撃は強力であり、師団は包囲攻撃を受け苦戦に陥った。

第六章　徐州は蔣介石の最後の拠点

徐州会戦

漢口攻略戦の一大前衛戦ともいえる徐州会戦が企てられた。江蘇（こうそ）山東、河南、安徽（あんき）四省にまたがる大平野、徐州はその中心にある。津浦（しんぽ）線と隴海線が交差する交通の要地であり、軍事上の要衝である。津浦線は事実上北京と南京をつなぐ陸上の唯一の連絡機関であり、隴海線は黄河に面した連雲港（海州）を起点として華中千二百二十五キロを横断、開封―宝鶏に至る大動脈である。同線は、黄河とともに中国大陸を華北、華中に二分するとともに甘粛省（かんしゅくしょう）の蘭州（らんしゅう）を経てソ連と結ぶ重大なコミンテルンルートを形成していた。

南京を失った蔣介石が第二の国防ルートと頼むのがこの隴海線であり、最後の拠点が徐州であった。彼は八ヵ年も前から巨費を投じ、同線上に横たわる連雲港、海州、新安鎮、運河、徐州、喝山（かつざん）帰徳、開封、鄭州（ていしゅう）洛陽、潼関（どうかん）西安をことごとく武装都市としていた。そして徐州を中心に李宗仁第五戦区司令長官を総指揮官として総勢約五十個師約四十五万の大軍を配し、抵抗線を敷いていた。

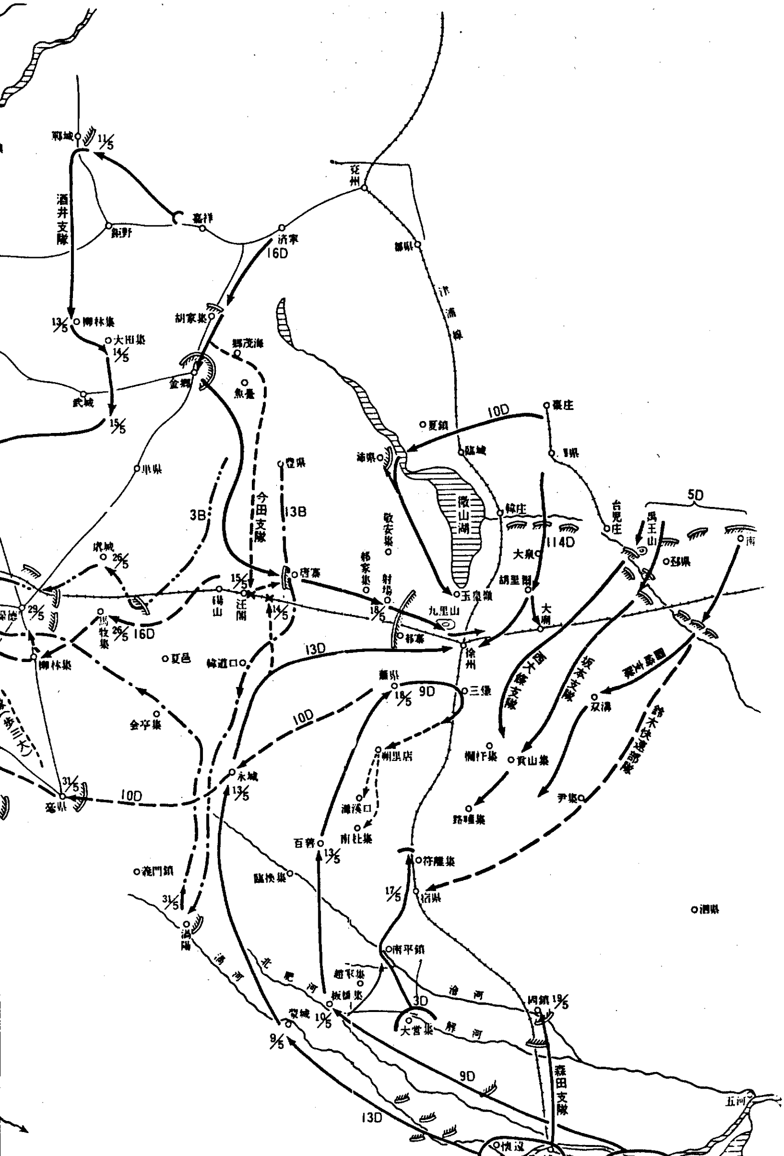
同地の死守が蔣介石の既定作戦であるなら、徐州占領は日本にとっても既定計画であった。つまり北支

那派遣軍（寺内寿一大将）はすでに済南、青島を結ぶ線から北を確保し、中支那派遣軍（畑俊六大将）は南京から上海に至る線を握っていた。徐州を北と南からはさみ討ちの態勢である。したがって徐州に集結する敵軍主力を撃滅するチャンスであり、もし主力大軍をセン滅できたなら支那事変を終結の方向へ導くことができるかも知れない、という考え方が軍首脳部の間にあっても当然であった。

詳細はこの企画の趣旨でないから省くが、深追いの危機を主張する不拡大派の参謀本部もついに徐州会戦の断行を決意するに至った。大本営の作戦は北支那方面軍は約四個師団をもって隴海線に向け攻勢をとり、このため主力をもって北方から徐州付近の敵を撃破し、約一個師団を開封東北方から帰徳方面の敵退路に向け進攻させる。

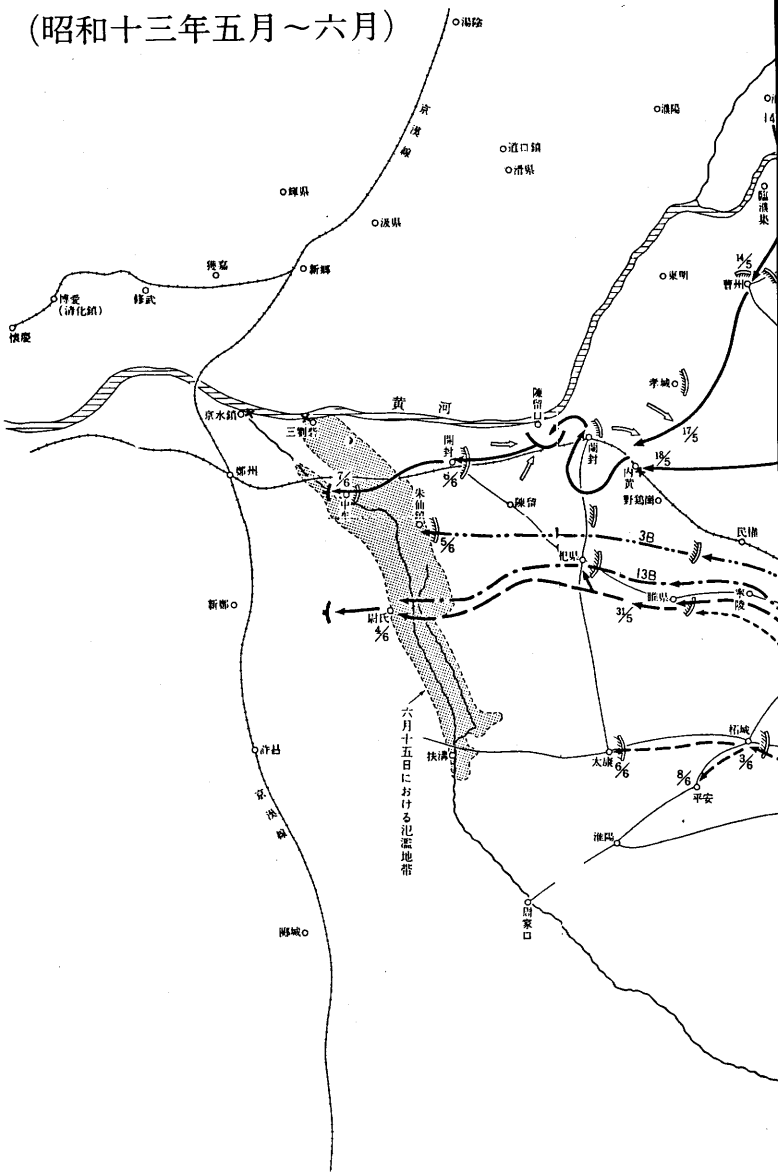
一方、中支那派遣軍は約二個師団をもって南方から北支那方面軍の作戦に策応するというものであった。参謀本部の作戦部長橋本群少将総指揮のもと在華兵力わずか七個師団で敵の総兵力五十個師、その軍勢四十五万という大軍を撃破しようというものである。〝う（烏）合の衆〟といっても五十個師ともなるとものをいう。これは大変な難事である。同会戦での敵兵力を具体的にいえば北正面には三個ＣＡ（集団軍）七個Ａ（軍）十四個Ｄ（師）攻勢兵力は二個ＣＡ、五個Ａ、十一個Ｄまた山東、臨析方面にはＡ、南正面は二個ＣＡ、四個Ａ、九個Ｄ、増加集結兵力は三個ＣＡ、五個Ａ、十二個Ｄであった。（戦史室の資料による）

大本営の企図により北支那方面軍は、第二軍をもって、徐州付近および津浦線以東に敵の大兵力を引きつけ、おもに徐州西方および西南から包囲して退路をしゃ断、ついで徐州を攻略、敵をせん滅するという作戦をたてた。このため第二軍は徐州付近の敵を撃破し、同地を占領する主作戦と、微山湖西南側から徐


鄆城
酒井支隊
嘉祥
鉅野
済寧
16D
兗州
鄒県
津浦線
胡家集
柳林集
大田集
金郷
武城
魚台
単県
3B
今田支隊
13B
豊県
沛県
10D
棗庄
夏鎮
臨城
微山湖
韓庄
5D
台児庄
114D
大泉
大廟
邳県
九里山
徐州
碭山
虞城
夏邑
馬牧集
16D
13D
9D
三堡
永城
蕭県
百善
宿県
南平鎮
3D
大営集
固鎮
森田支隊
坂本支隊
鈴木快速部隊
双溝
泗県
亳県
渦陽
蒙城
渦河
北肥河
澮河
淮河
懐遠
蚌
五河

徐州会戦経過概要図

(昭和十三年五月～六月)



州西方地区に導き、一部を同地東方地区に進めてこれに策応させることにした。

中島今朝吾中将の第十六師団の任務は、まず済寧付近に集結したあと魚台、金郷付近の敵陣地を突破し、徐州西方地区に突進して敵を撃滅すべし、また一部を挺進させ、喝山付近で隴海線をしゃ断すべしというものであった。四月二十三日、京漢線の警備についていた第三十三連隊に移転命令が下った。連隊は北京、天津を経て津浦線を南下、二十六日ひとまず済南に集結、さらに南下して五月五日から七日にかけ、徐州西北方の済寧に集結したのである。将兵の目の前に、果てしなく広がっているのは麦また麦の大平原であった。

三十三連隊、済寧に集結

――前線からの負傷兵に驚く――

奥福集の夜襲

第三十三連隊は五月五日から七日にかけ、済寧に兵力を集結した。このころ独断で台児荘（たいじそう）に突っ込んで悪戦苦闘の第五師団（広島、板垣征四郎中将）から連日おびただしい負傷兵が下がってきた。

「徐州戦ではドラム缶のような砲弾がとんでくるらしいぞ」

こんな話がまことしやかに兵士たちの間に伝わった。駐屯生活でのんびりしていた将兵は緊張した。事実、台児荘のわが軍を包囲した敵砲兵は質量とも日本軍にまさっていた。ドイツ、ラインメタル社の十五㌢野砲でその口径は、日本砲兵が使っている七㌢半砲の二倍。射程も五割方長く、わが軍が驚いたのも当

突撃前の態勢

然である。しかも兵隊は、蔣介石のトラの子の精鋭部隊であった。

さて、連隊が移動中の四日、早くも揚子江を渡った北上部隊、つまり畑大将指揮下の第三（藤田進中将）第九（吉住良輔中将）第十三（荻洲立兵中将）の三個師団は総進撃を開始していた。これに応じ寺内大将のもとにあった四個師団―第五（板垣中将）も台児荘から先発、ついでわが第十六師団（中島中将）を山西省方面から南下させ、さらに第十四師団（土肥原賢二中将）を独立兵団として隴海線の蘭封に進出させ、退路しゃ断の陣をしかせたわけである。

○　○　○

六日、まず第十六師団が済寧西南方地区の交通しゃ断と敵情地形捜索のため、師団直轄で前進を開始した。続いて九日、連隊主力に攻撃前進の命が下った。第一大隊副官だった宮木米吉さん（八〇）＝津市西阿漕町岩田一六＝の記憶をたどってみよう。

午前八時ごろ、第一大隊が前衛（前衛司令官、渡辺綱彦大

隊長）となって済寧城内を出発した連隊主力は、師団の右翼隊として南陽湖西岸を南下した。城門を一歩出ると地平線のかなたまで一面の青い麦畑が続く。麦の穂が初夏の陽光をキラキラと反射、まるで静かな大海のようだ。だが兵士たちには苦しい行軍だった。日かげはむろんない。連日の晴天でかわききった道路の黄土が舞い上がってはロや鼻を襲う。水筒はとっくにからっぽだ。吹き出す汗と重い装備によく耐えて行軍を続ける。

午後三時すぎ、先兵の第一中隊（田中嘉衛大尉）は前方から避難民の群れが近づくのを発見した。子供をかごに入れてかついだり、ロバや家財道具を積んだ車を引っ張ったり、およそ二、三千人の大集団だ。さらに前進を続け、夕方四、五時ごろ、数戸の無名部落に接近した。この部落にも、中国特有の小さなホコラ（日本の道祖神）が南向きに立っている。

このとき先兵小隊長、宮木准尉（大隊副官）は、約三百㍍前方の地点を白旗をかついだ中国兵が自転車で横切ったのを見つけた。こんな光景にはこれまでもぶつかったことがある。

（敵は近いぞ！）

なおも前方を偵察すると、約四百㍍の地点を車両をふくむ約一個連隊（日本軍の編成に換算）の敵兵力が移動している（陣地配備中？）のを認めた。先兵中隊と後続の大隊との距離は約五百㍍ある。ただちに報告を出すと渡辺大隊長、田中一中隊長がかけつけてきた。だが、そのころは敵との距離はかなり開いており、砂ぼこりのため確認出来ない。宮木先兵小隊長は「あれは避難民だ！前進、前進！」と問題にしない。

やむを得ず先兵中隊はしぶしぶ再び前進に移った。そのとたん、

ピューン

山砲級の敵砲弾が飛び込んできた。（そらきた！）と、兵士たちは麦畑に散開して姿をかくす。だが、後方の連隊主力は重い車両があるだけに退避がにぶい。敵砲弾は先兵中隊の頭上にうなりをのこし、連隊主力付近に二、三十発も続けざまにサク裂した。

闇の麦畑を無言前進

――敵陣は無気味な静けさ――

奥福集の夜襲

敵の砲撃が下火になると渡辺大隊長は「直ちに攻撃せよ、左一中隊、右四中隊ッ」と命令した。大隊長は口で命令していればいいが、中隊長や小隊長はそんな具合にはいかない。攻撃となれば兵の消耗を覚悟しなければならないし、相応の攻撃隊形も組む必要がある。

敵のトーチカを攻略焼き払う

「急げッ」

渡辺大隊長がせかしたとたん、

ダダダダ……

敵はこんどは機銃弾を浴びせてきた。

ピシッ！

不気味な音をたて、麦の穂が飛散する。とても頭は上げられない。敵は前方約七、八百㍍の奥福集部落にあった。民家は約百戸、部落のまわりには約二、三百㍍の土べいを張りめぐらし（正面だけの長さ約三百㍍）その前に水壕を構え、さらにその前方は約十五㍍にわたって麦を刈り取ってあった。大隊は四中隊を増援として第一線まで進出させ、左第一線に一中隊、右第一線に四中隊を配置、攻撃前進を命じたものの、敵砲火は迫撃砲もまじえて激しさを加える一方、とても明るいうちに攻撃は出来ない。やがて日が沈み、兵士たちは円ピでその場に壕を掘ってひそんだ。

そのときのもようを第一小隊長（少尉）だった渡辺修さん（伊勢市古市町出身、四十一年死去）は次のように語っていた。

敵はあらかじめ攻撃目標地点を決めておき、わが方をその地点まで引きつけておいて集中砲火を浴びせてきたかと思えるほど、すさまじい砲火だった。渡辺小隊長のそばにいた一人の兵が、銃で足をつつくので振りかえると、わずか二㍍ほど後に不発の迫撃砲弾が突き刺さっている。もしサク裂していたらこの身はこっぱみじんだ。さすが豪胆な渡辺少尉も冷や汗をぬぐった。（渡辺さんは予備役だったが、その勇気は

上官が目を見張るほどで第一級の将校である。大別山で負傷後送となるまで活躍、師団の予備役中、殊勲甲をもらったのは渡辺さんただ一人だった）そればかりか敵はわが方の麦畑にまぎれこんでいた。通信隊がいくら線を引っ張っても手応えがないので調べてみると、途中でぷっつり切断されている。

壕にひそむ兵士たちの頭上に月がのぼった。夜がふけるにつれ、敵銃火もおとろえた。九時ごろだろうか。ついに大隊本部から「午前零時を期して夜襲すべし」と命令がきた。渡辺第一小隊長、松田第二小隊長、宮木栄吉第三小隊長らは中隊長田中嘉衛大尉の壕に集まった。

田中隊長（後刻戦死）は悪い予感でもするのか、落ちつかないふうだった。夜襲は音を消して忍び寄り、無言で突っ込むのが鉄則だが、今夜はまず、てき弾筒をぶち込んで敵をふるい上がらせ、突撃ラッパを勇ましく鳴らして突撃しようということになった。

ただちに中隊のてき弾筒六筒を集めて北川藤正軍曹（鈴鹿市）の指揮下に入れた。酒好きな宮木小隊長は済寧を出発するとき、水筒に日本酒をつめ込んでいた。この酒を水サカズキがわりに分けて飲んだ。

「別れの水サカズキだぜ」と宮木、「いかん、いかん。そんな弱気では」と渡辺。

決行の午前零時を回ったが、まだ月がのぼっており、行動を起こせない。この間にも大隊本部から「早く前面の敵陣を占領せよ」とさいそくがくる。左の方で砲撃が始まった。二大隊らしい。この砲音をきいて「二時までに占領してしまえ」と督促がくる。どうやら師団の中でわが連隊の進出が一番遅れているようだ。負けん気の山田喜蔵連隊長がいらいらして渡辺大隊長のシリをたたいているようだ。

月が沈んでヤミが訪れたのは午前三時半（十日）を回っていた。一線中隊は行動を起こした。兵士たち

は暗ヤミの麦畑をひそかに前進した。(敵前まで約七、八百㍍を五時間もかかって進んだ)麦畑がきれ、ヨシなどの雑草地に入った。さいわい風があって草がサラサラ動いているので、敵はわが軍の接近に気づかない。敵前約二百㍍の地点でてき弾筒のすえつけを命じ、再び前進する。それまで側面縦隊で進んでいた中隊は横一線に広がり、突撃隊形をとった。ここからはほふく前進だ。雑草地を踏み分けると敵陣は約五十㍍前方にうかがえた。だが、敵の動く気配はない、無気味だ。

地獄絵の戦闘展開

――闇の中　敵味方入り乱れる――

奥福集の夜襲

敵壕の前方約十五㍍からは麦が刈り取られている。かなり以前に刈ったものらしく新しい芽が三十㌢ほどにも伸びていた。ここまで近づけば敵の監視兵も察知したろう。だが、まだ一発も撃ってこない。部落の入り口にある楊柳が風に揺れ、サラサラと葉ずれの音が聞こえるほどの静けさだ。それがかえって無気味だ。このとき「撃てェ！」の号令が後方のヤミにとんだ。

敵陣の手前約二百㍍の地点に放列をしていた第一中隊のてき弾筒六筒が、

ドーンッ、ドーンッ

同時に発射された。連続三発、計十八発が敵陣にサク裂、あたりを赤々と照らした。

「突っ込めッ」

怒号と同時に突撃ラッパが鳴り響き、喚声をあげて突撃した。あわを食った敵は乱射をくりかえし、手投げ弾をめちゃめちゃに投げつけてくる。無我夢中で突っ込む中隊は、部落直前で思わぬ障害にぶつかった。幅二、三㍍、深さ一㍍もある障害水壕が掘ってあったのだ。水が二十㌢ほどしかたまっていないのが幸いだった。暗やみの中を突入する兵たちは、つぎつぎ落ち込んでしまう。軍刀を振りかざし、壕を一足跳びにおどり越えた宮木小隊は、その瞬間ガーンとショックを受け、気を失って壕内にのけぞった。右足と左わき腹に端片創を受けた。(現在でも左腹に端片が残っている。敵手投げ弾と思っていたが、右足から摘出された端片は、手投げ弾のものよりかなり厚かった)

宮木小隊長の気がついたのはタンカの上だった。そこで語り手はふたたび渡辺修少尉にうつる。

宮木小隊長と前後して松田少尉ものけぞった。ほかにも負傷者が相ついでいる。(突撃前、撃たれても声をだすなと厳命されていたので、兵の中には苦痛に耐えるため、軍服のそでをかんだまま絶命したものもいる)

いったんひるんだ兵士たちもすぐ壕をかけあがり、次々と敵陣部落に突っ込んで行く。敵は民家の屋根にも陣取っており、上から手投げ弾をばらまいてくる。

このころ、突撃前に懸念されたことが実際に起こりはじめた。部落右の野戦陣地に攻撃をかけた第四中隊が目標地の抵抗が弱いのと部落内の激しい戦闘に、次第に部落の方に引きつけられてきたのだ。わが方は目じるしの白タスキをかけているが、なにしろ闇の中、一時は敵味方まったく入り乱れ、両軍のあげる喚声、断末魔のうめき声、銃声と爆発音でさながら地獄絵の戦闘を展開した。

戦闘はこう着状態となった。田中中隊長と渡辺小隊長、兵の三人は民家にかけ込み、窓から望楼の敵をねらった。渡辺小隊長がふと振り向くと田中中隊長の姿がない。「おい、どうした」と兵にきくと「ついさっき戸外に出た」という。（中隊長があぶないッ！）と戸外へとびだしたとたん、

ダーンッ！

と銃声。田中中隊長ののけぞる影がうつった。田中中隊長は左手に軍用拳銃を構え、えんがい銃座内の敵をやっつけようとのぞきこんだところを狙撃されたのだ。左胸貫通、即死だった。血のにおいと強烈な芳香がかけよった渡辺小隊長の鼻をついた。先に天津駅で汽車の時間待ちの際、渡辺小隊長と下車して香水を買った。その香水ビンを田中中隊長は左胸のポケットにしまっていた。敵銃弾は香水ビンを貫いたのだ。血と香水に染まって死んだ田中中隊長……。

田中嘉衛中隊長

思いかえせば、出撃前から不吉な予感がしていた。田中嘉衛中隊長は鈴鹿市出身、小柄だが豪傑で三尺四寸の白ザヤの軍刀を佐々木小次郎ばりに背に負っていた。三日前済寧で大尉への昇進通知を受けたばかりだった。（四月の進級伝達が野戦のため遅れていたのである）出発の朝、田中中隊長は尺八を吹いた。

「おや、尺八にヒビが入っているぞ、渡辺」
「吹けますか」
と渡辺小隊長が聞くと、
「うん、どうやらね」
と答え、故郷の夫人から届いたばかりの軍服を着て出発した。行軍中も突撃前も、この日に限ってそわそわ落ちつかなかった。先兵の命を受けながら前進が遅れ、かけ足で部署についた。やはり戦死の前には予感があるものだろうか。宮木さんも「済寧出発の朝、田中中隊長はいつになく小隊長を集め〝われわれも戦死を覚悟するときがきたようだ。生き残った幹部は戦死した部下の功績調査を必ず頼む〟といっておられました」と回想している。

飲まず食わずで攻撃

――激闘九時間余、部落を占領――

奥福集の夜襲

あたりがしらんできた。戦闘は市街戦の様相を呈した。兵士たちは民家の土壁を破って軽機や小銃を撃つ。敵は望楼や土べいから銃や手投げ弾を応酬してくる。敵の投げつけた手投げ弾を果敢にも投げ返そうと拾った瞬間、爆発して吹っとぶ兵もある。敵はすこぶる頑強だ。わが方の兵はもちろん、将校もほとんど戦傷死してしまった。そのうえ、太陽がのぼって一時間もするころには弾薬が尽きかけてきた。急拠、

後方の大隊に補給を頼む。

やがて大隊本部から、

「攻撃をやり直す。こんどは山砲をじゅうぶん撃ちこむから、ひとまずさがれ」と伝令がきた。だが渡辺修隊長らは、「このまま撃ってくれ」という。下がるときの方が危険が大きいし、それにいったん奪った陣地を下がるのはシャクだ。大隊本部から再び〝下がれ〟の伝令がきたが「死んでも下がらぬ」と頑張る。敵のチェコ機銃を奪った分部次男上等兵（鈴鹿市合川出身）は腰だめ射撃で壕（ごう）の敵をなぎ倒すうち、胸に敵弾を受けて壮烈な戦死をとげた。

ついにわが軍の砲撃が開始された。なにしろ一つの部落に敵、味方が頑張っているのだ。まかり間違えば同士撃ちだ。だが味方砲兵の腕は確かだった。楊柳の木にふれて暴発する砲弾もあったがほとんどが土べいの向こうの敵陣へ食い込んで行った。白煙弾が上がった。砲撃終りの合図だ。渡辺小隊長は約八十㍍前方の望楼がシャクだった。（おのれ、中隊長のアダを討ってくれよう）と奪った敵銃を握り締めると民家を飛び出した。高姿勢は無謀とさえ思われた。敵は（こしゃくなヤツ）とばかり狙撃してきた。

「ピュッ！」

一発がホオをかすめた。渡辺小隊長が引き金を引くのと敵が第二弾を発射するのと同時だった。

「うむ！」

敵弾は渡辺小隊長の太モモを貫いた。また一発は腕をえぐった。もんどり打った渡辺小隊長は民家のカゲにたどりついた。ところが撃たれた太モモから血がふきだしてこない。急いでズボンをおろすと、ポロ

リと弾が転がった。ズボンを貫いた敵弾は、どうしたはずみか太モモで横転、肉に食い込まなかったのだ。だが衝撃で太モモはみるみる紫色にふくれあがった。渡辺小隊長は軍刀をツエに立ちあがった。

焼けつくような陽光だ。それに兵士たちは昨夜から一粒も食っていない。一滴の水も飲んでいない。だが、へこたれなかった。やがて敵は退きはじめた。わが方はさらに攻撃の手をゆるめず、一方で負傷者の後送を急いだ。主力の退却を援護する敵の抵抗はかなり激しく「負傷者はウ回してさがれ」の声がとんでくる。一時失神した渡辺小隊長は、気がつくとまた頑張りつづけた。かくて激闘九時間余、午後一時ごろには奥福集部落を完全に占領したのだった。

だが、この戦いで第一中隊は将校を全部失い、横山伝次軍曹(安芸郡芸濃町椋本出身)が中隊長代理となって指揮をとるありさま。死傷者は兵を合わせて三十余人にのぼった。第四中隊も数人の死傷者を数えた。

負傷した渡辺修さんは天津の野戦病院に一ヵ月半入院した。〝幹候〟あがり(第九連隊)昭和十二年の召集で第三十三連隊に入隊、大別山で負傷して内地に帰るまで常に第一級戦に参加、予備役ではめずらしく殊勲甲(師団の予備役兵中ただ一人)をもらった。十八年ふたたび召集、第百五十一連隊補充隊で北島に上陸、独立混成団の中隊長(大尉)でホロ島で終戦。当時同島には陸海合わせて六千余の兵がいたが、生き残ったのは八十三人にすぎず、その一人だった。

部下にたばこ回す

――気落ち着かせ攻撃開始――

奥福集の夜襲

奥福集の夜襲で壮烈な戦死をとげた第一中隊長、田中嘉衛大尉（鈴鹿市池田町出身、戦死して少佐に昇進）は連隊の〝名物男〟だった。軍曹で中隊指揮班になった鈴鹿市下大久保町、北川藤正さん（七〇）は終始中隊長と行動をともにしていたので人柄をよく知っている。

田中さんが大尉に進級の辞令を受けたのは済寧だった。北川軍曹が連隊本部から命令を受け、

（中隊長どのきっとよろこぶだろう）

とこおどりしながら辞令を渡すと、

「北川よ、おれも年貢のおさめどきがきたようだぞ」

と、にが笑いを見せたものだった。思えば死の予感だったろうが、真新しい肩章をつけたのはたった一日だった。夜襲の日も一中隊が先兵だった。田中大尉はまっ先を進む。北川軍曹が一歩でも先にでようものならば腕をつかんで引きずる。人に先を越されるのがきらいなのだ。突然、「先頭止まれ」と命じた。畑のどまん中に部下を止め何をするのか見ていると、ズボンをおろして脱ブンをはじめた。先兵が止まったので後続の主力もとまらざるを得ない。

「先頭は何をやっているかッ」

後ろから渡辺大隊長がどなってきた。だが田中大尉は平気なものだった。近くで止まっている部下は気が気ではない。このときずっと後方にいた山田連隊長は馬上から双眼鏡をのぞいていたが、田中の放列だ、待ってやれとニガ笑いした。一望千里の麦畑、連隊長のメガネはシリをまくって息ごんでいる田中大尉の姿をとらえたものらしい。

田中大尉は神戸中学（現神戸高）出身、見習い士官当時がやはり第一中隊だった。連隊通信班で出征したが、大橋毅郎大尉（員弁郡出身）が緒戦の東辛荘で戦死したので、そのあとへ就任したわけで古巣へもどったのと同じだった。着任早々、

「おれのフンドシをむしてくれ、シラミがいっぱいだ」

わが家へ帰ったみたいだった。小次郎ばりに大刀を背中に負い、胸には尺八をぶらさげていた。軍服の胸は尺八ですり切れている。帽子はいつもツバを後向きにかぶっている。将校行李（こうり）には三味線を放りこんでおり、南京入城の夜などトテシャンと爪びき、芸者がきている、と兵隊たちをあわてさせたものだった。

着任早々の八里庄の戦闘のときだった。主力の第一線、敵前四、五百㍍の地点で攻撃中、畑のあぜにとりついたとき、突然「射撃やめ」を命じた。いぶかる部下に、「いまからシラミ取りをせよ」と命じたのだ。敵弾雨飛の中である。部下たちも命令だから攻撃を中止して、それぞれ地物によってシラミとりを始めた。そこで北川軍曹を呼ぶと通信紙に何やらサラリと書き、

「北川、これを連隊副官のところまで持って行け」

と命じた。北川軍曹が敵弾をくぐって大島少佐に届けると、通信紙を読んでうなってしまった。

「弾薬欠乏せり、補給されたし」

と書いてあるのだ。しばらく頭をひねっていた副官、「ふむ、どうやらたばこをくれの意味らしい」

こうなるとトンチ比べだ。副官が手をつけた一箱を受け取ると、北川軍曹は命がけで弾雨をくぐりぬけ、田中中隊長のもとへ帰った。

「さすが副官だ、ものわかりがええ」などと言いながら各小隊長に一本ずつ分けて回した。田中大尉はたばこを吸わぬ人だが、部下のためにこれほど気がつくのだ。各小隊長がいっぷくして気を落ち着けるのを待ってから、

「攻撃開始！」

と、どなった。

無錫でも常熟でもそうだが、いつも自分が斥候に出る（将校斥候）。自分で敵情を探ってきてから命令を下す。まず一小隊をつれて突撃、占領すると同隊をその地に止め、再び後方にもどって次の小隊をつれ進む。部下を進ませない。

一方、湯水鎮では中隊もかなりの損害を出した。彼は戦死した部下のそばにいちいちぬかずき、ホオずりをして、

「おれの攻撃方法が悪かったのだ。許してくれよ」と祈って回った。こんな具合だから部下から絶対の信頼を受けていた。上野市西明寺出身の稲森伍長（大東亜戦争で戦死）など左足に貫通銃創を負いながら

もはなれたくないとがんばったものだ。

北川さんは昭和八年の入隊、このあとやはり第三十三連隊で比島に渡り三浦支隊で奮戦、十九年三月比島派遣臨時建築第一中隊第三小隊（准尉）勤務となったため玉砕をまぬがれ、二十二年一月復員した。

死線越えた人見軍曹

――負傷から手術まで運つく――

奥福集の夜襲

当時第一中隊第三小隊長代理（軍曹）だった人見重保さん（七四）＝津市野崎垣内＝も奥福集の夜襲で精神感応を体験している。

今の人見重保さん

五月九日午後、先兵となって前進中の第一中隊は奥福集部落の敵陣とぶつかった（既述）。敵は約一個連隊とみられた。対する味方は一個大隊。しかも攻撃は二個中隊で敢行するのである。昼間攻撃は不利とみて夜襲の命令が出た。十日午前三時、田中大尉を先頭に中隊は行動を起こした。円ピで壕を掘っては一歩一歩前進する。

突撃直前、ふと左の腰に手をやった人見軍曹はは

っとした。ないのだ。お守りの袋がない。満州事変の出征以来、あちこちの神社で受けた百余体のお守り札を袋に入れ、ずっと腰に下げていた。あたりはもちろんまっ暗、手さぐりで探したがない。部下にも探してもらったがやはり見当たらない。不吉な予感がした。

（今夜やられるかも知れない）

そこへ田中中隊長がきて、

「人見、今夜は注意しろよ」

とアメ玉を一つくれた。その甘かったこと。すぐそのあとで展開された突撃で田中中隊長が死に、人見軍曹は重傷を負いながらも生き残ろうとは夢想だにしなかった。

敵陣地は鉄条網を張り、背丈を没する深い場所があり、その向こうにえんがい銃座の本陣があった。味方のてき弾筒、機関銃が戦いの火ぶたを切った。敵もチェコ機銃で激しく抵抗を開始した。まず鉄条網を約十㍍幅切断して突破口を開き、そこに結びつけてきたナワを伝って突入する。これを察知した敵はチェコ機銃と手投げ弾を集中してきた。鉄条網を越えた人見軍曹はいったん壕に飛び込み、一気にかけあがる。平常ではとてもできないことだった。

先頭を切って突入した田中中隊長は早くも破片創を受け、自分で包帯をしているようす、宮木米吉小隊長も負傷、後続の部下をみればバタバタやられ、境内に折り重なっている。倒れた戦友を踏みこえ突入する兵、壕を越えれば敵味方入り乱れて突く、切るの白兵戦。声をかけてみてかろうじて相手を確認する。

やがて夜は明け切り、太陽が照りはじめた。戦闘は続いている。敵は頑強に抵抗しているのだ。民家の

屋根にひそんで手投げ弾を投げてくる。すでに田中中隊長も戦死し、幹部はほとんどやられていた。人見軍曹は、腰のあたりから太ももにかけて生あたたかいのに気がついた。調べると数個の手投げ弾破片が水筒を割り、こぼれた水がハダをぬらしていた。朝までまったく気づかなかった。

（命びろいした）と一息つき、部隊を集結しようと、占領した民家のかげから、からだを出したときだった。

チーン、とタマがほおをかすめた瞬間、ドカッ。目の前で砲弾がサク裂、吹っとばされた。気がつくと右手首から先がもぎとられ、ザクロのように割れた傷口から鮮血がほとばしっている。敵狙撃小銃弾が、腰に下げていた二個の手投げ弾に命中、足元にはじきとばされてサク裂したのだ。もし運が悪く腰にさげたままサク裂したら粉みじんになっていたろう。あるいはもう一歩早く、民家からとび出していたら破片を全身にあびていただろう。消えたお守り袋の救いか！人見さんはそう思った。

かけつけた衛生兵（四日市市大矢知出身、古市といったか？）に止血してもらうと、敵の目にふれないようタンカを断って歩いて後退をはじめた。

戦場はひざあたりまで伸びた一面の麦畑。人見軍曹は麦畑の中に伏せ、敵弾をさけながら一歩一歩はって後方に向かった。傷口はしびれているが、止血した場所が激しく痛む。のどは焼けつくようにかわく。次第に気が遠くなっていく…このまま戦いが終わるまで放置されていたら死んでいただろう。だが偶然、まったくの偶然、だだっ広い麦畑の中で、し（輜）重隊の山本良三さん（小学校の同級生）が通りがかり、失神している人見軍曹は発見されたのだ。

山本さんはすぐに人見軍曹をかついで野戦病院に収容した。ところが病院で手当てをしてくれたのが、これまた親類の小森衛生兵（四日市市富田）さらに天津の兵站病院では軍属できていたおじに会った。たとえ同じ連隊で出征しても戦場ではなかなかあえないものだ。それがわずかの間にいろいろな人にあえたのだ。偶然には違いないが、人見軍曹には不思議な恩恵としかいいようがない。

「その後経過がよく、内地に返されることになった。ところが出発の前日になって急に四十度近い熱がでた。やはり化のうしていたのだ。軍隊では一度決まった日取りは変更出来ない。わたしはタンカに乗せられ、重体の赤札をかけられて列車に乗せられた。車内を巡視した軍医中将が『重体患者を送りかえせば船中でみすみす死なせてしまうではないか、すぐ降ろせ』と命令、直ちに天津の陸軍病院へ運ばれ、切断手術を受けた。しかしこの時が一番苦しく、死線を越えた実感はこの時だった。それにしても負傷から手術までまったく運がついて回っていた。奇跡とはこのことでしょうか」と人見さんは回想している。

前線の弾薬が不足

――樋口小行李長　自らも背負い出発――

奥福集の夜襲

第一大隊小行李（しょうこうり）の奮戦記――。小行李長（軍曹）だった樋口平一さん（七三）＝員弁郡大安町丹生川中＝は当時のもようを次のように語っている。

行李には大行李（食糧、被服など宿営、給与に必要な物品を補給する挽馬編成）と小行李（各種弾薬化学戦資材、衛生材料、器具など戦闘中に必要な物品を第一線に補給する、ダ馬編成）があり、連隊本部、各大隊本部に所属していた。大隊小行李は、連隊小行李と第一線の中にあって大隊長の直接指揮のもとに行動する。花やかな第一線に比べ、縁の下の力持ち的な存在だが、部隊の戦闘力が十二分に発揮出来るか否かは実に小行李の双肩にかかっており、かげの苦労は大きかった。当時歩兵のことばに〝戦闘中は弾薬を運んでくれる小行李長の顔がホトケに見え、宿営、休養中はおいしい食物を運んでくれる大行李長がホトケに見える〟というのがあった。

曹軍口樋頭先　隊部李行小ゆく野戦

原則としては予備隊に弾薬を渡せばよいのだが、歩兵の苦労を目の前に見ていればそんなことは言っておれず、天幕に包んで弾薬を背負い、弾雨をくぐって第一線に直接交付する場合がほとんどだった。

だいたい徴集年の新しい者で編成されていた。小行李の編成は長（下士官）班長二人（上等兵）＝以上乗馬、それに馭兵三十人（ダ馬三十頭）補助兵六人（小銃）の計三十九人。出征当時第二大隊小行李長、北橋政蔵（伊勢市出身、河北カン定戦で戦死）

第三大隊同、向井尚（志摩郡出身、南京戦で戦死）両伍長はいずれも戦死、全戦闘に参加して生還したのは樋口さん一人である。連隊小行李（バン馬編成）長、軍曹、樋口信義さん（七三）は三重郡菰野町鵜川原に健在である。

樋口平一さんの調べでは連隊大行李長は山中修一（四日市市智積町）＝本部用だけの補給＝第一大隊大行李長吉川治祐（四日市市生桑町）二大隊同、太田第三大隊同、辻正治郎（四日市市川島町）の各軍曹であった。

○　○　○

一大隊小行李が活躍したのは奥福集の戦闘である。

5月9日晴れ、連隊は旅団の主力となり、第一中隊を先兵として午前六時出発、行軍約十キロ、牛辺店で待機のあとさらに前進。午後七時、奥福集の手前に達したとき、がん強な敵の抵抗にあい、野砲、迫撃砲弾など各所に落下、前進できず。本夜第一、第四中隊をもって夜襲することとなり、小行李はざん壕を利用して露営せり。待機中、辻茂一等兵（鈴鹿市白子町）盲管銃創にて隊包帯所に収容される。夜襲にて第一中隊は田中大尉以下幹部全滅、多数の戦死者を出せり。

同10日晴れ、前日より多数の犠牲者を出せし攻撃も効なく、さらに第四中隊を増加して攻撃す。だが敵の抵抗はますます強く、このため大隊長渡辺少佐は前線の弾薬不足を判断し、わが小行李に第一線直接交付の命を下した。（樋口さんの陣中日記）

すでにこのことを予期していた樋口小行李長はダ馬を後方部落に待避させ、辻吉一一等兵（三重郡菰野

町潤田）以下十人に小銃弾二千発、手投げ弾四十発、てき弾筒弾二十発を持たせ、本部の位置に待ち構えていた。渡辺大隊長（度会郡玉城町田丸出身）が命令を下したときには、すでに出動の準備が整っていた。

その当時の樋口軍曹、中国で

渡辺大隊長が気をよくしたのはもちろんである。樋口軍曹は第二回目の交付準備を第一班長、藤森明正上等兵（四日市市新浜町、比島で戦死）に命じ、待機中の部下に諸注意を与えた。そして樋口軍曹は、自らも天幕に包んだ弾薬を背負い、愛刀〝相模の助広〟を腰に、

「行くぞッ」

まっ先におどり出た。

ヒュルヒュル

たちまち迫撃砲弾が降ってきた。散開を命じ、歩兵と同じ要領で前進、停止をくりかえしては第一線に近づいて行く。見渡たす限りの麦畑は絶好のしゃへい物だった。だが、家屋や望楼に銃眼をくりぬいている敵にとっては、天幕の包みを背負った小行李は好適の目標だ。チェコ機銃、迫撃砲弾がいよいよ激しく集中、麦畑の中から頭を上げることが出来ない。

「畜生ッ、ねらいやがったな」

樋口軍曹は部下にほふく前進を命じた。

前線で弾薬が欠乏

――出口上等兵が徒歩連絡――

奥福集の夜襲

大隊本部の位置から三百㍍ほども前進したころだったろうか。前方から一人の兵が走っては伏せ、伏せては走りながら近づいてきた。よくみると樋口さんと同じ丹生川出身、第一中隊てき弾筒筒手、出口三郎上等兵だ。

「ああ、小行李きてくれたか。昨夜からの戦闘で中隊長以下多数の死傷者をだしたが、タマが不足して思うように攻撃できない、一刻も早く補給を頼む」

肩で息をついている。彼は弾薬補給の要請のため、大隊長の所へ連絡に行く途中だった。有線電話が敵によって切断されて使えず、本部と第一線の間は徒歩連絡だった。

「ようし、弾薬交付は引きうけた。本部の位置に藤森班長以下八人が交付準備を完了して待機中のはずだから、大隊長に第一戦の状況を報告して直ちに小行李を出発させてもらってくれ」

樋口平一軍曹は出口上等兵に依頼して、さらに前進を続ける。戦場で弾薬が欠乏したときほど心細いことはない。ことに中隊長以下多数の戦友を失いながらタマがないため敵と対じをよぎなくされている第一戦を思うと、一刻の猶予もならない。第一戦まであと二百㍍、ほふく前進では遅い。これしきの敵弾がなんだ。愛刀を握り締めた樋口軍曹は「目標、奥福集部落の右端、各個躍進！」と大声でどなって、まっ先

に飛び出した。後ろに、右に左に十個の鉄カブトが麦畑の中を見えつかくれつ第一線へ急進する。

前線ひとたび火を吐けば
弾薬交付の重き任
タマに骨身をさらすとも

われらは小行李、いざこのときぞ（樋口さん作詞「われらは小行李」）

次々到着する兵の携行した弾薬を第一中隊と第四中隊に交付して、全員無事を確かめた樋口軍曹はほっと息をついた。（みんなよくやってくれた）そう思うと、あついものが頬を伝わった。樋口さんは部下おもいで有名な人だった。

第一回交付を終えた樋口軍曹に第四中隊長瀬古中尉は重傷患者の後送を頼んだ。直ちに戸板を利用してタンカをつくり、重傷の兵を乗せて麦畑の中を引きずりながら後送に移った。敵の眼前だから担いで歩くことが出来ないのだ。途中出口上等兵の伝令で大隊長から急拠出動を命じられた藤森班長以下八人が散開しながら前進してくるのに出あった。

「おお、きたか、きょうはいつもより手ごわいぞ。このあたりから各個躍進で行け。目標は部落の右端だ、気をつけて行けよ」

樋口小行李長は指示して激励した。

「無事でよかったなあ」

と、弾薬を背負って進む者、「気をつけろよ」とタンカを引っ張って下る者…。

このときだった。

「小行李長！」

と麦畑の中から叫ぶ声がした。声の主をさがしあてると、第四中隊から弾薬交付要請にだされた伝令服部上等兵（一志郡美杉村出身）だった。途中敵弾にやられ、ムシの息だった。

「タマは届けたぞ」

と抱き起こすと、手を握りしめ、「おれはもうダメだ。胸の手帳に女房子供への遺言を書いてくれ」

とかすかに言う。「よし」樋口軍曹はペンを取り出した。そこへ同じ中隊の軽傷者が後退してきたのであとを頼んで下がった。[樋口さんは、息の切れるまで任務遂行に努めていた服部伝令のことを遺族に伝えようと探していたところ、伝令の名は服部藤吉氏（美杉村八知）であることが四十五年ぶりに分かった。樋口さんは五十九年、戦友をともなって服部さんの墓前に詣で、遺族に当時のことを話した]

一方、藤森上等兵の指揮で躍進中の第一班は、敵前二百㍍の地点で坂下留松一等兵（四日市市高角町）が右ひざ関節を貫通されて倒れた。三角巾で応急手当てをした藤森班長は「大丈夫だ。おれたちがもどるまでここで待っていろよ」というや、坂下一等兵の携行した弾薬も自ら背負い前進を続けた。第二回目の藤森班は小銃弾千五百発、手投げ弾四十発、てき弾筒弾二十発を第四中隊へ交付した。

昨夜来の激闘で第一戦の弾薬消耗量は多かった。大隊長は続いて第三回「弾薬とともにハシゴを作って第四中隊に交付せよ」と命じた。樋口小行李長は直ちに部下に命じ、後方部落で資材をかき集めてハシゴをつくり、手投げ弾小銃弾などとともに樋口軍曹以下八人で運び補給。このころから敵火線はおとろえ始

めたが、なお陣地の敵はしつように抵抗を続けていた。大隊長は催涙筒による最後の攻撃を企て、交付を小行李長に命じた。第二班長、崎実男上等兵（一志郡白山町三ヶ野）以下四人が前線にかけ出して行った。時に午前十一時、こうしてさすがの敵も退却を開始、第一線は部落内を掃討、完全に占領した。午後五時、部隊は集結、再び前進に移った。

樋口さんは「通信紙に遺書を書いて持ち歩いていたから、死ぬとか生きるとかは考えなかった、ひたすら部下のことを考えました」と回想している。現役二ヵ年は京都輜重兵第十六連隊、十六年七月再び応召、独立輜重兵第五十七大隊で満州へ。十九年八月第六十六師団通信隊で台湾へ、同地で終戦、准尉。

現在の樋口さん

予期せぬ先制攻撃

——第八中隊第三小隊　敵の集中砲火で孤立——

ハン荘付近の戦闘

すでにふれたことだが、日本軍の〝攻勢決戦〟（奇襲、先制攻撃）にたいし、中国軍は常に〝守勢戦略〟

の体制をとっていた。が、まれにはわが軍の出鼻をくじくような先制攻撃を加えてくることもあった。徐州戦ではことに果敢な攻撃をかけてきた。大きな戦闘ではなかったが、ハン荘（そう）部落で敵はわが軍をおびやかした。第八中隊第三小隊の分隊長（伍長）だった山川清治さん（七四）＝津市乙部＝の体験談である。

連隊主力が奥福集部落の敵野戦陣地に苦戦しているころ、その左に展開していた三浦大隊（第二大隊）は主力よりひと足先に李荘部落（済寧南約六キロ）に進出、攻撃体制を整えて九日朝には再び前進を開始した。

めざすはもちろん徐州である。強い太陽を浴び、果てしない麦の平野を南へ南へ進む。察するにはるか左後方の砲声は姉妹連隊の奈良三八であり、三浦大隊はどうやら両翼部隊より敵中にかなり突出して進んでいる状況のようだ。

その日、午前中に少数の敵と小ぜり合いのあとこれを撃破、夕方にはハン荘部落近くまで進出した。十五、六戸の部落とみえたが、もっと大きかったかも知れない。民家にひそんでいた敵の射撃が始まった。清水操少尉（名張市赤目、のち大別山で戦死）指揮の第八中隊が先兵となって直ちに展開、攻撃を開始した。麦畑でしばらく立ち往生をよぎなくされたが、味方砲兵の援護射撃のもとにじりじりと攻めつけ、午後八時過ぎには占領、夜間反撃を試みた敵も難なく撃退した。

明けて十日未明、前進準備中、突然敵はハン荘めがけて野砲の集中射撃を浴びせてきた。たちまち兵士たちのいる民家に命中、三、四十人が死傷、大隊小行李（弾薬輸送）などの馬十七、八頭のうち多数が死

んだり傷ついたりした。部落の前方を警戒中だった山川分隊長は十五㌢もあるかと思える敵砲弾に（敵にこんなすごい砲があったろうか。もしや味方の砲弾ではないだろうか）と驚いて、清水中隊長に問い直すと「まさに敵砲弾だよ」と注意され、（敵はなかなか手ごわいぞ）と改めて身を引き締める。続出の負傷者は急設の仮包帯所（民家のひとつ）にかつぎ込まれたが、そこも敵弾が命中、手当て中の負傷者の多くが戦死した。

間もなく、麦畑の前方約四㌔の地点にある松林付近に点々と展開、前進してくる敵を発見した。敵兵力はつかめないが（そのときは大敵と感じた）次第に部落を包囲するかっこうで迫ってくる。無線班が後方の砲兵に救援の連絡を急ぎ、砲撃が始まったが、こんどは無線班の民家に敵弾が命中、後方との連絡も援護射撃も途絶えてしまった。山川分隊長も兵たちも（ここで死ぬのか）と決心した。兵士たちは民家の窓から小銃を撃ちまくる。味方はわずか百四、五十人、進撃また進撃のわが軍にとって、孤立して敵に包囲されるのははじめての体験だ。この心細さといったらない。

敵はかなり接近してきたが、それ以上は突撃してこない。かれこれするうち、八時半から九時ごろ、本

敵陣のトーチカ

隊と離れていた六中隊と機関銃小隊が後方から復帰してきた。その到着が待ち遠しい。もどかしく感じた。やがて味方の砲兵も射撃を再開、敵は退いて行った。砲兵は次々と射程を伸ばし、退却する敵にリュウ（榴）散弾を撃ち込んだ。敵は奥福集で連隊主力に抵抗していた部隊の一部とみられた。

こうして一息ついた兵士たちは戦友の死体処理のため一部を部落に残し、昼過ぎには次の攻撃目標魚台めざし前進に移った。途中、祭家行（さいかこう）や下庄などの小部落の敵を無血でけ散らし、十四日夕には魚台北方三キロの地点に迫った。

未明に敵が迫撃砲弾

――大隊は大混乱、損害続出――

ハン荘付近の戦闘

当時第八中隊の指揮班軍曹だった西川尚吾さん（七三）＝尾鷲市＝にとってもハン荘付近の戦闘は印象に残るものだったという。

西川さんらは済寧を出発、行軍の途中前線から続々下がってくる負傷兵と出会った。日本軍初の敗戦である徐州東北、台児荘の戦線でこっぴどくやられた第十師団（姫路）あるいは第五師団（広島）の将兵たちだ。〝徐州戦ではドラムカンみたいな砲弾が飛んでくるというぞ〟と、さすがの〝うめぼし部隊〟の将兵も緊張した。

西川軍曹も覚悟を決め、第二機関銃中隊にいる義弟の柳田光太上等兵（紀伊長島町）とあい、「からだを

大事にしろよ。次の戦闘はきついということだからな」とお互いに励まし合ったばかりだった。

ハン荘部落は先兵の第八中隊（清水操少尉）が奮戦し、午後八時過ぎには占領した。付近は麦畑で近くには干上がった川があった。敵はこの河原に陣取っていたが、まずこれを撃退して部落に突入した。いったん退却した敵は、夜陰に乗じて再び河原伝いに襲撃してきた。追っぱらったものの、敵と近接した第一線は騒然とした一夜だった。明けて十日未明―午前三、四時ごろだったろうか。小行李が飯ごうすいさんのため、火をたきはじめた。そのとたん、待ってましたとばかり敵は迫撃砲弾を集中してきた。大隊はたちまち大混乱、損害が続出する。こんなとき頼りとするのは大隊長だ。たまたま命令受領のため本部にいた西川軍曹も思わず三浦大隊長のそばへ寄った。さすが大隊長で泰然自若として顔色一つ変わっていない。

畦地孝一伍長

午前八時ごろ、それまで本隊から離れていた（連隊長指揮下か）第六中隊（辻四五郎大尉）が復帰してきた。ところが、占領したはずのハン荘部落が敵に包囲されている。直ちに戦闘に加わった。第六中隊の畦地孝一伍長（畦地元尾鷲市長の長男）もここで戦死した。第六中隊長だった辻四五郎さん（尾鷲市出身）の話では、畦地伍長は敵迫撃砲をまともに受け数発も吹っとばされ即死した。しかし吹っとばされた瞬間、彼が「バンザイッ」と叫んだのを聞いたという。付近にい

た将兵も彼の絶叫をきいた。壮烈な最期であった。

こうして戦闘は昼過ぎまで続いた。午後一時過ぎになってやっと敵は退却、これを友軍砲兵が粉砕した。この戦闘について西川さんは次のように説明している。

占領した部落で露営するのが日本軍の戦法だったが、徐州戦ごろになってシナ軍はこの戦法に精通し、集結して休養中のわが方に迫撃砲弾の雨を降らせてきた。このためわが方も次の戦闘からはいま奪取した部落から一つ下がって露営する戦法を適宜とったのである。

西川さんは大東亜戦争では十七年召集、十九年八月まで久居におり、その後新島の独立歩兵大隊に移り、同地で終戦を迎えた。

ひそかに安興集へ

――態勢整え敵を一気に駆逐――

孫家茶園付近の戦闘

ハン荘祭家行（さいかこう）を攻略し、兵力を集結した連隊は翌五月十一日にはひそかに安興集に転進、十分な攻撃態勢を整えたあと、常家庄念外朱の敵を一気に駆逐、李砦に兵力を集結した。このとき師団から「師団の前進を援護せよ」との命令を受け、連隊長は直ちに第一大隊をもって馬集を占領した。十二日夜、第二大隊は砲工兵の配属を受け、魚台攻撃に向かうことになり、十三日午前零時さらに南へ前進を開始した。第一大隊を中心とする連隊主力は金郷の攻撃に向かった。

連隊主力は十三日朝から行動を起こした。連日の晴天続きで行軍は苦しい。〝ひげがほほえむ…〟どころか汗とほこりでどの顔も真っ黒。小休止のたびに、倒れるようにすわって水筒一本の水を大切に飲む。赤痢の発生で生水が厳禁されているからだ。要領のよい兵は水筒を二本も用意していた。(阿山郡伊賀町新堂、兼武治さんの話) 午後三時過ぎ、金郷の前衛陣地である孫家茶園(そんかさえん)孔家楼(こうかろう)両部落付近に集結した。渡辺大隊長は第二中隊(阿波健二中尉、上野市友生)に左第一線として孫家茶園を、第四中隊(戦時編成中隊、長不詳)を右第一線として孔家楼を攻撃するよう命じた。孫家茶園は戸数六、七十戸、中国特有の高さ約二㍍、厚さ約六十㌢の土レンガで作ったヘイを四方からめぐらした部落、まわりは一面の荒れ地でヘイの回りに道路がついている。敵情はつかみにくい。(津市伊倉津伊藤実さんの話)

第二中隊は部落の約千㍍の手前から道路を左側にはいって散開、第一小隊(加藤祐造少尉、四日市出身)が右第一線、第二小隊(川村可夫少尉、一志郡嬉野町宮古に在住)が左一線となり、(第三小隊は予備)攻撃前進に移った。一線に散開した中隊はやや高い姿勢のまま前進していく。部落から一発もとんで来ないからだ。野砲の援護射撃があるはずだが、敵の抵抗がないのでそのまま突進する。

だが、部落まであと五、六十㍍の地点まで迫ったとき突然土べいが沈黙を破った。敵はわが方を引きつけておいて掃射する企図だったのだ。

チェコ機銃が激しくほえたてる。不意を食った兵士はとっさに土の中へ頭を突っ込むように伏せる。これを見て後方の砲兵が援護射撃を開始した。だが敵味方の距離が近過ぎ、第一小隊の付近でサク裂、多数

の負傷者がでた。このため砲兵は数発撃っただけで射撃を中止、予備の第三小隊(伊藤源五郎准尉、久居市)が手薄になった右第一線に急拠増加され、右後方へう回して、望楼に逃げこんだ敵兵をせん滅した。しかし敵弾はいよいよ激しく、兵士の目の前にかみついて土煙をあげる。加藤第一小隊長が胸を貫通されて戦死したほか、負傷者が次々折り重なる。一線小隊は、敵弾をぬって前方約三十㍍の低いアゼにとりつく。これから土べいまでは二十㍍余の至近距離、ちょっとでもからだを出すことが出来ない。敵は土べいにくりぬいた銃眼から撃ってくるから小銃では歯がたたない。手投げ弾を投げるには土べいがじゃまだ。このころほふく前進中の阿波中尉が背中をやられ、川村少尉が代理となった。(川村さんの話)

川村可夫さんの現役時代

右第一線でも同様クギづけ状態だ。このとき右後方から三台の友軍戦車が勇姿を現した。

「戦車だッ」

兵士たちは口々に叫ぶ。地獄に仏とはまったくこのこと、戦車は地面にしがみついている兵士の前で巨体を停止、兵士たちはそのかげにかけ込む。歩兵の指示で指塔を部落に向けた戦車は土べイの銃眼めがけて猛攻撃を開始、さらに部落のまわりを回りながら撃ち進む。歩兵も包囲隊形に移る。敵銃座はたちまち

沈黙、一線兵士は崩れ落ちた土ベイを乗り越え、部落内に突入、午後五時半、完全に占領した。

一方第四中隊方面も戦車の協力で午後七時半ごろ孔家楼を占領した。この戦闘に参加した友軍戦車は中、軽合わせ十三台で連隊にとって戦車との共同作戦はこれがはじめてだった。

敵弾、麦をぬい走る

――伏せたまま一歩も動けず――

盧家楼の戦闘

盧家楼の戦闘は苦戦だったが、このときのもようを第十二中隊第三小隊第一分隊の一等兵だった寺田嘉三郎さん（死去）＝久居市東鷹跡出身＝は生前次のように語っていた。

六月十日早朝、朝食をかきこんだ第三大隊は盧家楼めざし、攻撃前進を開始した。この付近の戦闘は果てしない麦の平原に広く展開しての戦いだ。連隊の両翼の距離は長い。

前進を続けるうちに正面に盧家楼の土壁が近づいた。敵は約二千、部落前面にトーチカを配し、無数の銃眼から激しく射撃してきた。しゃへ

麦また麦の徐州進撃

い物はまったくない。わが方八百の将兵は麦畑に伏せたまま一歩も進むことも退くことも出来なかった。各自円ピで穴を掘って、かろうじて頭を突っ込み、背のうを前に置いてタマを避ける。敵弾は地上五、六十㌢のところを走ってくる。麦の穂先が食いちぎられ、付近は丸坊主になってしまうほどの激しい火戦だ。わずかでも頭をだせばたちまち射抜かれる。

第十二中隊は戦時編成の中隊だから老兵がほとんど。寺田一等兵も大正十年兵、疲れていた。なにしろ済南を出てからだけでも千㌔余りを踏破したし、一日百㌔を行軍した日もある。行軍だけではなく、途中十数回の戦闘もしている。中隊長久我豊三大尉（他県出身）の老練な作戦、小隊長、吉田八郎准尉（大別山で戦死、以後は津市高茶屋小森奥山茂中尉）の勇敢な指揮で損害や脱落者も比較的少なくここまで戦い続けてきた。

敵火線はいよいよ激しい。麦をぬってくるタマの音が無気味だ。寺田さんは（おれもいよいよやられそうだ）と思い、どうせ死ぬのならいさぎよく最期をとげたいものだ、とハラを決めた。家族の顔が浮かんだ。妻と生後八ヵ月の長男を残してきた。伏せたまま視線をめぐらすと戦友も頭を地に突っこんだまま一言もしゃべらない。みんな同じ思いなのか。ふとこちらを見た友の顔は青黒く、目だけが異様に光っている。友はまた無言で伏せてしまった。寺田一等兵も頭を土に突っ込んだ。

「うううッ……」

タマにあたった戦友のうめき声がたえまなく聞こえる。こんどは俺の番か、と妻を思い、子どもの顔を引きよせる。正午を過ぎ、そして夜のとばりがおりた。もちろん飲まず食わず、伏せた姿勢のままだ。

ついに払暁を期して突撃が企図された。寺田一等兵は、銃剣に祈りをこめた。敵を一人でも多く殺し、いさぎよく死のう、そう決心すると恐怖もうすらぎ、妻や子どもの顔も消えた。空—まったく雑念は消えてなくなった。

月明りの中、野砲、大隊砲、重機がいっせいに活躍を始めた。敵陣が火柱をあげて吹っとぶ。「行くぞ」久我中隊長が軍刀をきらめかせた。「突撃ッ」の号令。大喚声をあげて地を蹴った。敵チェコが狂ったように火を吐く。トーチカをめざし、しゃにむに突進すると敵ははや退却を開始した。あわてふためく敵兵に無我夢中で銃剣をくり出す。夜明けが近い、月明りの中ですさまじい白兵戦が展開された。やがて完全に占領、はじめて飯ごうを手にすることが出来た。冷たく固い飯、おかずといえばザラメの塩だけだ。（きょうも生きのびた）ほっと息をつきながら飯をかきこむ。あたりがしらみはじめた。朝だ、やがて前進命令が下るだろう。

無気味な金郷城壁

——野砲弾にもびくともせず——

金郷戦略

金郷（きんごう）—魚台（ぎょだい）を結ぶ線は徐州西北方を守る敵の重要拠点だった。第十六師団の任はこれを抜くことであった。徐州会戦の連隊戦闘詳報は現存しないので、おもに将兵の日記や記憶によってまとめた。

○　○　○

金郷城に一番乗りを敢行したのが第四中隊、岡本祐憲さん（多気郡勢和村、元丹生大師神宮寺住職、四十五年没）の率いる第二小隊であった。

進撃を続ける連隊主力（第一、第三大隊）は五月十四日朝には金郷西方に迫った。金郷は中国の典型的な城壁をめぐらした町。遠くからみると大陸の平野に黒ずんだ真四角の箱をふせたようだ。土レンガづくりの城壁は、一辺の長さだけで四、五百㍍に及び、高さは十㍍余りもある。しかも城壁は銃座を楽に据えつけられるほど厚い。長い歴史を物語る、風雨にさらされたその姿は、近づくにつれ無気味にみえる。これまでの戦闘で砲弾不足を味わっている将兵は金郷城を見たとき、はや肉弾攻撃を覚悟した。

金郷突入のわが先兵

攻撃は、わが連隊が師団の左第一線で西門を、姉妹連隊の奈良第三十八連隊が右第一線で北門をそれぞれ攻撃することに決った。午前七時ごろ命令を受領、連隊は第一大隊（渡辺綱彦少佐）を第一線とした。渡辺大隊長は第四中隊（瀬古三郎中尉）に西城門占領を厳命し、第三中隊を左第一線に配して城壁西北角へ攻撃を命じた。

砲兵の援護射撃によって、火ぶたを切った。平野に展開した歩兵の頭上をわが砲弾がうなりをあげて飛ぶ。だが、予期した通り金郷城は堅固だった。野砲弾が命中してもぱっと白い傷跡が残るだけ、高射砲まで水平射撃で悲壮なまでの協力ぶりを見せているが、厚い城壁はびくともしない。敵はわが砲撃を無視したかのように、城壁の上から重機やチェコ機銃、迫撃砲を浴びせてくる。歩兵にとっては腹だたしい限りだ。

第四中隊はやっとのことで、城門西方四、五百㍍の小部落にとりついたものの、それ以上はあぶなくてとても進出できない。西城門前には土べいで囲まれた五十戸ばかりの部落がある。そこまで進出すれば敵弾の死角に入ることができるだろうが、その部落までは途中数戸の民家があるだけで、しゃへい物のない麦畑だ。兵士たちはやむなく民家に入って敵のスキをうかがうより仕方がなかった。

頼みの砲撃が功を奏さないとあっては、歩兵によって直接城門を爆破し、突撃路を開くしかなかった。そこで破壊、突撃の両班が編成されることになった。各小隊から一個分隊ずつ計四十人ばかりを選んで両班に分け、これを岡本第二小隊長の指揮下に入れた。

白昼、しかも敵真正面からの攻撃である。恩賜のタバコとビールが配られた。これは最前線の兵士たちに決死の覚悟をうながすものだった。岡本小隊長は、突撃班長の水谷軍曹（津市出身）と当番兵の伊藤善一上等兵（員弁郡藤原町出身、この戦闘で戦死）の三人で紙コップを合わせた。水サカズキである。岡本小隊長は酒を飲まないが、伊藤、水谷は酒豪だ。ところがきょうに限って伊藤上等兵は一口なめただけでコップを置いてしまった。

「どうしたのだ伊藤」
「小隊長、きょうはなんだか胸が詰まって飲めないのです」
酒好きのいつもの彼ではない。
「伊藤らしくないぞ。そんなことでは死ぬぞ」
岡本小隊長と水谷軍曹は伊藤上等兵の肩をたたいて元気づけたが彼は力なく笑っただけだった。
戦死の予感があるものだろうか。伊藤上等兵は数時間後の戦闘で壮烈な戦死をとげたのである。将兵が戦死する前には、なんとなくふだんとは変わった行動に出る。日ごろほがらかな兵がむっつり屋になったり、ケチな人が気前よくなったり、きちょうめんな人がゲートルを逆に巻いたりする。
話は先にとぶが、山田連隊長も死ぬ前日には珍しく自ら軍旗を持って部隊を出迎えたりしている。

攻撃前進命令下る

――平野に身をさらし善戦――

金郷攻略

初夏の太陽は将兵たちの頭上高くのぼり、照りつける。午前十一時を期して攻撃前進命令が下された。
岡本祐憲少尉の第二小隊は右に、正亀少尉の第三小隊が左に展開する。敵は掃射を開始した。所々に中国特有の土まんじゅうが盛り上がっているほかは一面の麦畑だ。まったくの平野に身をさらしての前進だ。
この状況をみて、連隊砲、大隊砲も援護射撃を開始、速射砲は歩兵を悩ますチェコ銃座を狙い撃ってくる。

一線中隊は敵迫撃砲のサク裂する中をぬって昼下がりにやっと城門前の部落にとりついた。思ったとおり、その地点は死角に入って城壁からの敵弾は来ない。一息ついた兵士たちは鉄カブトを捨て、全員手ぬぐいをハチマキに締め直した。夜間の戦闘に備えて目じるしの意味だったが、日本兵には重い鉄カブトよりもハチマキがぴったりくる。

その部落から第四中隊の攻撃目標の西城門までは百㍍余りだ。部落の中央にはまっすぐな道路が城内に通っており、両側の民家からちょっとでもからだを出すと正面城門上の銃座からたちまち猛火をあびる。敵情を見ようと、道路側にちょっと体をずらした東上等兵（一志郡と記憶）は三発の銃弾を受けてのけぞった。衛生兵がかけつけると「俺の傷を見せろよ」と、かすかに微笑さえしている。三十歳前後の召集兵で職業は巡査だったと記憶している。だいたい戦場では僧職と警官は勇敢だとされていた。腹部の負傷ははたで正視出来ぬほど苦しむものだが、当たった直後はあまり痛まない。

衛生兵が傷口をみせると東上等兵は「一発、二発…ごていねいに三発も当てやがった」と、自分で状態を調べている。かけつけた岡本小隊長が、

「東、傷は浅いぞ、しっかりしろ」

と励ますと、

「俺はもうダメだ」

と首を振った。彼は自分の傷の深さを知っていた。そして岡本小隊長の手をしっかり握りしめ、

「小隊長、おれのカタキ討ちに敵を三人殺して下さい」

苦しい息の下から言う。

「よし東、見ていろ、きっと金郷城はおれが一番乗りしてみせるぞ」

と、手を握りかえす。

「小隊長、いろいろお世話になりました。（戦友に向かい）みんなありがとう」

とはっきり最後のあいさつをし、手を振ってタンカで後送されていった。岡本小隊長はじめ戦友たちはみな男泣きに泣きながら見送った。彼はまもなく絶命した。

かけがえのない部下東の残した最後のことばを岡本小隊長はいくども反芻し、きっと敵をやっつけてみせる、と心に誓った。

一方連隊長山田喜蔵大佐もじっとしておれないのか、連隊本部と軍旗を第一線近くまで進め、しきりに督励している。大隊本部の渡辺大隊長はそれ以上にじりじりしていた。右第一線に展開している奈良第三十八連隊に遅れをとっては師団最強を自負するわが第三十三連隊の名折れだ。渡辺少佐も剛胆なら、山田連隊長も勇将型の人物、第三十八連隊との競争意識をあおりたてられる上、三八側の激しい砲火を聞いては兵士たちもじっとしておれなかった。

やがて、城内爆破のため工兵一個小隊が配属された。これがまた勇敢な工兵ばかりだ。勢い込んだ突撃隊はいっきょに敵前四、五十㍍の地点まで進出、最後の突撃隊形をとる。焼けつくような太陽も、その頃には地平線のかなたまで沈みかけていたが、西陽を背いっぱいに受けた兵士たちの若い血は燃え、汗ばんだごつい手で銃を握りしめた。

夕闇の城壁に日章旗

――兵士たち「バンザーイ」――

金郷攻略

城門上の敵は、わが軍の行動を認めると猛烈な機関銃掃射を開始した。だが城門爆破の工兵一個小隊は、道路上に煙幕を張ると、果敢に銃火の中にとび込んで行く。突撃隊も負けじとばかりあとに続く。

「がんばれ！」

突然、兵士たちの後から大声がかかった。振り返ると、山田連隊長自らが軍旗を振っているのだ。

「おい、軍旗だ」

「軍旗が見ている」

兵士たちは口々に叫んだ。普通軍旗は戦闘中には出さないものだった。兵士たちは、軍旗の前で死ぬのを無上の光栄と信じていた。岡本祐憲小隊長も、ここが死に場所だ、と決心した。

「爆破ッ！」工兵の合図に突撃隊はその場に伏せた。

ガッガーン！

大音響とものすごい煙をあげて城門の一角が崩れおちた。黄色火薬の爆発で口の中はザラザラ、全身〝キナ粉〟をかぶったようだ。

次の瞬間、地をけった突撃隊はしゃにむにその中へ突っ込んで行く。工兵隊は城門の右横に鉄のハシゴ

金郷北門にあがった日章旗

をかけた。

「それっッ」

一番乗りをめざす岡本小隊長が、まっ先にかけ上ろうとすると、当番の伊藤善一上等兵が、

「隊長あぶないっ、自分が…」

と叫んで岡本小隊長を引きもどし、真っ先にかけあがる。突撃隊長水谷軍曹が負けじと続く。だが城壁の上には敵ががんばっていた。おどり込んでいった伊藤上等兵は手投げ弾を浴びて壮烈な最期をとげた。ああ、彼は死を予感したのであったか、突撃前、酒好きな彼がビールを一口でやめたのだ。次々にハシゴをかけあがってくる兵士たちは伊藤上等兵の屍（しかばね）を乗り越え、城壁上の敵陣を蹴散らしていく。

ひと足遅れて左第一線から攻撃していた第三中隊も城壁を乗り越えた。これを見た敵は退却を開始。夕闇の城壁に日章旗がひるがえり、兵士たちは声をかぎりに叫んだ。バンザーイ、バンザーイ。

天にものぼる気持ちとはこのことだった。真っ黒に日焼け

した将兵のヒゲづらに、ただむしょうに涙がこぼれた。ラッパが高らかに鳴り渡った。時に午後七時十分。堅固を誇った金郷城西門は完全にわが手にくだった。先陣を競った奈良第三十八連隊の姿はまだ見えなかった。

三発の敵弾を浴びて戦死した東上等兵とかわした一番乗りの約束（既報）を岡本小隊長以下戦友は見事に果たしたのだ。東や伊藤に、城壁にひるがえる日の丸をみせてやりたかった。

この戦闘は珍しく従軍記者が第一線まできており、新聞に紹介され、家族をよろこばせたものだった。

○　○　○

第九中隊長だった太田雄三さん（八八）＝津市船頭町三三八一、P―一〇三一＝は、第三大隊方面のもようを次のように話している。

「苦しい闘いでした。われわれは西日を背に受けて攻撃した。野砲で城門を破り、城壁前の幅約五㍍のクリークは工兵の肩車で渡った。野砲が開けた突破口はやっとくぐり抜けられる程度の穴である。このとき田嶋良一ラッパ手（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町）が行方不明になったので探し回ると〝ここにいます〟と城門で彼の声。一番乗りをしていた。山田連隊長は彼の勇敢な行動をほめたが、

今の太田雄三第九中隊長

私は中隊長として〝勝手な行動はいかぬ〟と注意した。真夜中に入城、敵は北方へ退却していった。敵は黒砂糖を泥がわりに使ったザン壕を築いていた。この黒砂糖でぜんざいを作って食べました。あのおいしかったことが忘れられません」

円ピで壕を掘り待機

――激しい銃火にクギづけ――

魚台攻撃

連隊主力が金郷攻略に向かっているころ、第二大隊（三浦俊雄少佐）は別動隊となって、その東南方の魚台を攻撃していた。

当時伍長で第八中隊第二小隊第二分隊長だった兼武治さん（故人、阿山郡伊賀町新堂出身）は、そのときのもようを生前次のように語っていた。

主力と別れて夜行軍を続ける第二大隊は、十三日（五月）午前五時には早くも魚台北方約二千㍍の地点に進出、兼伍長ら一、二分隊は駐止斥候に出た。まず魚台前方約千㍍の部落―敵の前しょう線と衝突、数十分で撃破、直ちに総攻撃の準備を整えた。小休止し、朝食をすませた大隊は左第一線に第八中隊、右第一線に第七中隊を配置、午前七時を期して野砲、連隊砲援護のもと総攻撃を開始した。だが魚台の城壁は十四、五㍍、厚さもこれまた十四、五㍍はある。友軍の砲撃は命中しても白い粉をふりかけたような跡が残るだけ、まるで軍艦に空気銃を撃っているみたいな手ごたえだ。

これに対して敵は迫撃砲とチェコ機銃を浴びせてくる。城壁の上からだけでなく、下の方にも銃眼をくり抜き、水平射撃してくるからまったく歯が立たない。このまま続ければ損害ばかり大きくなる、と判断した三浦大隊長はひとまず後退を命じ、重砲の増援を要請した。

午前六時半、重砲と歩兵第九連隊（京都）が到着、状況を検討の上第九連隊だけは魚台攻撃に加わらずそのまま隴（ろう）海線のしゃ断に向かった。

大陸の夜は寒暖の差が激しく、日中は焼けつく暑さだが、夜はひんやりするほど涼しい。わずか三時間ほどで戦闘中止となり、民家のかげで前夜来の疲れを休めていたが、兼伍長も夜風にハダを刺され目がさめた。満月なのかまるい月が麦畑を青白く照らしていた。からだを起こすと、どっかりあぐらをかき、空を仰いだ。上陸以来いくつかの激しい戦闘を経てきたが、魚台もなみたいていではなさそうだ。

昼間の戦闘で痛感したが、歩兵操典どおりにとてもゆかない。苦戦とはこのことだろうか。あすの総攻撃はもっとひどいだろう。ことによると自分もやられるかも知れない。二十九歳の兼伍長のおもいは故郷へとんだ。妻と三人の子どもの顔がつぎつぎ浮かぶ。子どもたちは無邪気に笑っているが、妻の顔はさびしそうだった。

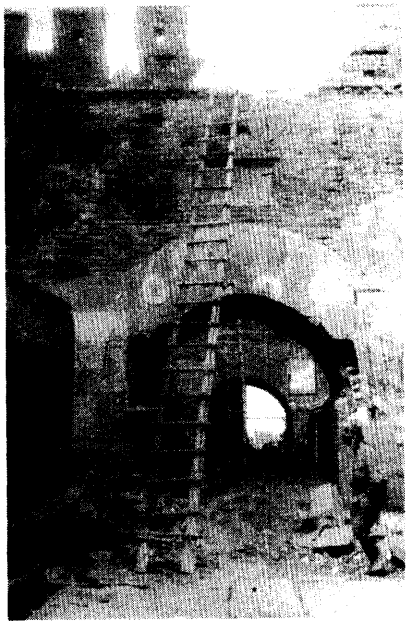
（お父さんはあす戦死するかも知れないぞ）妻や子供の顔に向かって呟くと覚悟ができた。妻子と知人に手紙を書き、別れを告げた。そして神仏に祈った。

明けて十四日、未明から強風が吹きはじめた。空は黄じんにおおわれ、晴れているのか曇りなのか分からないほどだったが、太陽がのぼりはじめると風もしだいにおさまり、きょうも暑い。

午前七時、重砲部隊の十五㎝りゅう弾砲が攻撃の火ブタを切った。発射後の衝撃音は大地をゆさぶり、ぼろぼろ崩れ落ちる民家の壁土が兵士たちの肩にふりかかる。心強い。重砲の威力はすごい。敵城壁はたちまち砲煙に包まれ、間もなく城壁の東北角が崩れ落ちた（突撃路が出来たぞ）兼伍長はいよいよ緊張した。

午前八時攻撃開始、七中隊は前日同様右第一線に展開した。敵前約千五百㍍に進出すると有効射程にはいった迫撃砲弾がうなりをあげて落下する。チェコ機銃もほえる。だが、兵士たちは麦の中をじりじり前進、城壁まで数百㍍（千㍍ほどあったかも知れない）というところまで迫ると、急にぱっと視界が開けた。同時にチェコ機銃弾が雨のように集中する。その地点まで一㍍ほどに伸びた麦畑だったが、この先敵陣まではきれいさっぱり刈り取られているのだ。しゃへい物はなにもない。進めば掃射される。しかし是が非でもきょう中には落とさねばならない。

第一線中隊は激しい銃火をおかしてなお前進を続けた。敵前二、三百㍍からはまったくクギづけとなってしまった。兵士たちは円ピで壕を掘り、もぐり込んで待機した。



堅固な魚台の城壁
城内は三重になり奥行30米

白昼の攻撃を断念

――夜襲かけ城壁を占領――

魚台攻撃

攻撃前進を開始してからもう一時間はたった。だがタコつぼにもぐり込んだ将兵は、そのまま身動きも出来ない。敵の射撃は下火になったが、それはわが方が壕に入ったからで、ちょっとでもからだを出すとダダダダ…と集中弾がくる。

夏の太陽は、しだいに強く照りつけた。穴の将兵はじりじり照りつけられ、鉄カブトは手でさわればヤケドするほどのあつさ。水筒の水はとっくにからっぽだ。くらくら目まいがする。こうして戦線はこう着状態のまま、昼は過ぎ、やがて日没になった。

朝八時過ぎから夕六時ごろまでまる十一時間、将兵は麦畑に掘ったタコつぼにひそんだままだった。三浦大隊長は白昼の攻撃を断念し「午後九時を期して夜襲すべし」と第一線中隊に命じた。（午後三時下令）

第一線中隊は夕闇を利用して散開した戦線をひとまず整理、態勢を整えた。やがて十六夜の月がこうこうと戦場を照らし始めた。真昼のような月光のもとでは、敵に気づかれずに接近することはむずかしい。午後九時の攻撃開始に先立ち、まず野砲と重軽機が城壁の敵陣めがけて制圧射撃を開始した。左第一線は第八中隊、同隊の二、三小隊が砲撃でくずした城壁東北角から、一小隊が正面の北門から突撃、第七中隊が右第一線でその右を攻める手はずを決めた。砲撃が始まってまもなく、にわかに暗雲が襲来、あたりを

闇に包んでしまった。しかも稲妻が走り、雷がとどろき、いまにも大粒の雨が降ってきそう。「天佑（てんゆう）とはこのことだ」将兵は活気づいた。

午後九時半、第一線中隊は攻撃前進に移る。全員目じるしの白タスキをかけている。城壁は闇の中にとけ込んでおり、昼間のカンをたよりに進む。第八中隊は目的どおり、城壁東北の破壊口にたどりつく。

（兼さんは昭和二年兵。十九年三月再び応召。第五十一警備大隊糧秣係で台湾の高尾へ。短歌が好きで、陣中日記にも多数したためてある。去る三十三年十一月愛知県護国神社遷宮祭の献詠歌「殊勲甲のかの日の君と会うまでと涙あふるる今日のみまつり」は吉井勇選で一位だった）

○　○　○

田中隊第三小隊の分隊長は山川清治さん（津市）だった。敵はまだ気がつかない。朝方、撃ち破った突破口はすでに、敵は土のうを積んでふさいでいる。城壁は背丈の五倍はあろうか。山川分隊長はまっ先にかけあがり、突きだしたレンガを足場に城壁によじのぼる。闇をすかすと二㍍幅もある城壁の上に黒いかたまりが動く気配。

敵だ。

確かめたとたん、やにわに手投げ弾を浴びせてきた。

ドカンッ

あたり一面にさく裂、白光色が黒いトバリを破り、両軍を照らしだす。

なかばすべり落ちるように城外に身をかわした山川分隊長は、両手首を城壁の上端にかけたままの姿勢

城頭にあがった日の丸、ああこの感激

でスキをうかがった。またも近くで手投げ弾がさく裂したと見た瞬間、城壁にかけた両手首に焼け火ばしを押しつけられたような激痛を感じ、数㍍下にころがり落ちた。敵はあるだけの手投げ弾を投げつけ、大石まで城壁上から投げ落としてきた。手だけでなく足や腰にも破片を受けていた。

後続の戦友が突撃している。進退に困り、二十分ほど城壁の最下部にうずくまってへばりついたままだった。そこへ遅ればせに前進してきた度会郡出身の某兵隊に発見され、その兵隊は突撃をやめて山川分隊長を背負うとさっさと千㍍ほども後方に下がってくれた。山川分隊長にしても、その兵にとってもとんだ命拾いだったわけだ。こうして午後一時、城壁の一画を完全に占領した。敵は南門から退却してゆく。そのころから黒雲が去り、ふたたび月光が輝いた。城内掃討にかかったが、敵は完全に逃げ去っていた。この日（十四日）南下中のわが軍は徐州西方地点で隴（ろう）海線の鉄橋を爆破した。

砲一発で敵は退却

――大隊砲「愛国号」が活躍――

徐州へ

五月十三日ごろのこと、というから金郷付近の戦闘だろうが、地名、日時ははっきり記憶に残っていない。第三大隊歩兵砲小隊長、野呂征久さん（八〇）＝鈴鹿市江島町桜ヶ丘＝の奮戦記。

第三大隊は師団の右側前衛として前進を続けていた。同大隊には砲兵一個中隊（砲兵第二十二連隊）と工兵一個小隊（工兵第十六連隊）が配置されていた。

軍服姿の野呂征久さん

その部落にさしかかった。敵がいた。五、六百㍍の城壁からパンパンと小銃を撃ちだした。

「敵だ！」

その声に、野呂小隊長の率いる愛国号二門は、

「それッ、師団砲兵（十二門）に先手をとらすな」

と素早く前進、野呂小隊長の号令がてきぱきとぶ。

「砲を解け」

「射撃用意」

「観測手、分隊長前へ」
「砲を据え！」
分隊長と八人の砲兵の動作はこまネズミだ。ものの一、二分で砲を馬（三頭）からはなし、照準器をつけ、標程点と照準点を決める。装薬は命中率の最もよい二号（火薬量の調節ぐあいで一号から四号まで区分している。二号は弾道が肉眼で見える。）
「準備終わり」
と分隊長が報告。
「第一弾発射撃て」
野呂小隊長の張りつめた号令。
ドカン！
みごと第一発が城壁の頂上付近に命中した。このころ、やっと師団砲兵の発射準備が終わったが、敵は「愛国号」の第一発で退却していった。
大隊砲「愛国号」（一号、二号の二門）は支那事変の始まる前、三重県民の献金でつくり、戦用品として久居に保管していた。口径七十ミリ、最大射程二千四百㍍、破裂の状況は野砲と同じで半径十五㍍以内の人馬を殺生する力があった。野呂小隊長が出発のとき、「ぜひ自分に使わしてくれ」
と兵器委員をくどき落とし、久居の野辺野神社でおはらいを受けてもっていったもの。寿命ぎりぎりの一万発近くを撃ったが砲も優秀なら、隊員も「県民から献納されたもの」と、チームワークはぴったり。

砂塵をついて徐州へ徐州へと人馬は進んだ

いつの戦いでも第一戦で活躍し、特に紫金山、大別山の戦いでは前進に苦しむ歩兵を援護し、横井喜代蔵第十中隊長に「愛国号がきたからには大隊は安心」といわせた。

またこんな戦果もある。漢口作戦後、大隊が岳口鎮を攻撃しているころ。漢川の曲がりくねった川陰に船のエントツが見えた。汽船らしいが距離は約千㍍。愛国号の命中率は千㍍前後が一番よいが、何しろエントツだけしか見えないのだ。上田大隊長は「ふうん」と腕組みしたが、「よし、撃ってみろ、ただし二発だけだぞ」

喜んだ野呂小隊は一発、二発と放ったが命中したようすはない。

「お願いです。もう一発だけ」

「よかろう」

野呂小隊長は部下を励ました。

ドカン！